

日本社会の「安全」の受け止め方の変化： 外国人編集の日本語辞典の検討から

Historical changes in the perception of the word “ANZEN” in Japanese society:
Three Japanese dictionaries edited by foreigners

関西大学 社会安全学部

辛 島 恵美子

Faculty of Societal Safety Sciences,
Kansai University

Emiko KANOSHIMA

SUMMARY

Japanese language is very complicated to understand deeply because of its historical development. In a Japanese language system, ancient Japanese thinking, Chinese civilized thought, which is the source of kanji, and modern Western thinking coexist. It has a good side, but the negative side is not small in safety-related discussions. It aims to clarify the complicated circumstances of Japanese language. For this reason, three Japanese dictionaries edited and published (1603, 1830, 1867) by foreigners whose native language is not Japanese are subject to analysis.

Key words

ANZEN (安全), safety, security, society of Jesus, W.H. Medhurst, J.C. Hepburn

1. はじめに

1.1 研究の目的と論文構成

本論は安全問題領域でよく使われる基礎語彙解釈の歴史の変遷に関する研究の第一報である。高度な科学技術を駆使して運営される現代社会では、関連の諸技術を安全に使いこなすために、国の枠を超えた情報交換や情報共有の場を設定して、より成熟した技術にすべく努力を続けている事例も増えてきた。その典型例、ひょっとした

ら優等生とも思われていたのが原子力発電所の安全対応であった。国際原子力機関（International Atomic Energy Agency, 略称：IAEA）の中では、まずは起きないはずだが、しかし起こり得る最悪の事態に備えようとの発想は共有され対策も講じられていた…はずであったという。しかし何が起こり得る最悪の事態なのか、何を想定内とし、何を想定外とするのか、西欧先進諸国と比べて日本の姿勢はかなり楽観的であったことが2011年の事故後の調査で明らかに

なり、社会的騒動にもなった。

起こりうる最悪の事態に楽観的とは何を意味するのだろうか。リスク認知に何らかの問題があった可能性は容易に推測できる。しかし現代日本社会では「リスク」というカタカナ言葉を頻用し始めている昨今ではあるが、それ以上に頻用しているのは「安全」の言葉である。労働安全、交通安全、産業安全、医療安全等々、目指すべき結果を「安全」の言葉で表現しているようにみえる。かつては交通事故防止対策とも表現していたが、現代ではもっぱら交通安全対策と表現する。この特徴は欧米文化の影響ではなく、むしろ抵抗の姿勢にすらみえる。なぜなら欧米社会では昨今「リスク」関連語を頻用しているからである。これを受けて日本でもリスク関連語を用いる専門領域も増えており、その翻訳もさかんである。しかし多くの場合、「risk」を「リスク」と表音文字化しているにすぎず、誰もがわかる日本語に翻訳してはいない。「危険性」との訳は、他の類似語（たとえば danger, hazard）との区別がつけにくく、カタカナ表示で定義して区別しようとしている。しかし法律用語を含めて公式の文章などでは、先に指摘したように、「リスク」の言葉を避けて「安全」の言葉を用いており、明らかに意識的であり、現代でも日本社会では安全問題という捉え方をしている。

「リスク」と「安全」とは反対関係にも見える言葉として、リスクに注目して問題を解こうとするのか、安全に注目して問題を解こうとするのかは、発想や行動に違いがでてくると予想できよう。リスク関連語の方はISO/IEC国際規格などでも言葉の定義から熱心に議論している。たとえば“safety”を“free from unacceptable risk”と定義し、議論を深めている。他方、日本社会の目指す「安全」の理解あるいは定義はどうなっているだろうか。広辞苑(2018)^[1]は「安

全：①安らかで危険のないこと。平穩無事。②物事が損傷したり、危害をうけたりするおそれがないこと」と解説する。文部科学省の科学技術・学術審議会で行った定義は「安全とは、人とその共同体への損傷、並びに人、組織、公共の所有物に損害が無いと客観的に判断されることである。ここで言う所有物には無形のものも含む」である^[2]。2001年9月の米国同時多発テロ後に結成された懇談会であり、その定義は広辞苑「安全」②の定義をアレンジした形にみえる。

「安らかで危険のないこと」を欧米社会が理解できるように翻訳するのは大変だろう。また「損傷や損害のおそれが無いと客観的に判断されること」は具体的にどう実行しうるのかと尋ねられたら、何と回答するのだろうか。国際規格を日本も受け入れているとの主張もあるだろう。欧米社会の定義や発想を借用、受容するのも悪くはないが、先にも指摘したように、リスク問題と捉えるか安全問題と捉えるかが同じではないとすれば、矛盾する問題を無視し、都合の良い部分のみを借用して、一般社会の人々を議論に巻き込むのは倫理的にいかがなものだろうか。なにしろ世界の先端的リスク議論では専門家みの合意形成の姿勢を脱して、一般社会の人々の理解を深め、議論に参加してもらうための努力に向かっているだから。

日本社会は伝統的に議論好きとは言い難い社会であり、“専門家に一任”に抵抗の少ない社会である。信頼関係が成立しているともいえるが、結果がよければ当然の結果と受け取り、結果が悪ければ厳しく責めたてる姿勢でもある。問題解決に責任のある立場の専門家は厳しい立場にたたされてもいる。技術者の発想は経営者の発想としばしば対立することにもなりがちで、社会的支援や支持を得たいと思っても、そうした議論をオープンに出来る社会にはまだな

っていない。

また、言葉は文化ともいわれるように、問題の捉え方には歴史的積み重ねの結果が反映している場合も多く、良くて悪くても固まっていた動かしにくく、一朝一夕には変わりにくい現実がある。外国語の習得方法と母国語の習得方法の違いからも容易に推測できるように、一度定めた内容の修訂正となると、がぜん母国語の方が不利で、多くの時間と努力を要する。そうはいっても、社会の在り方、在り様は明治の頃と比べても大きく変化しており、その変化に適応させた発想や行動の軌道修正作業を避けることはできない。ただし、明治維新時のように、伝統を全て捨てて外国方式受容に向かうほど劇的な変化や修正を必要としているだろうか。日本の安全の発想は欧米社会のリスクの発想と比較して劣るのだろうか。言葉の見かけの特徴から判断する限り、演繹型と機能型の違いを認めることもできそうであり、むしろ整備次第では、安全の発想の枠組みの中に西欧のリスクの発想を取り込んで活かすことも十分可能にみえる。

この問題の提案に入る前に、もう一つ付け加えたいことがある。現代は高度な専門分科型社会をつくり出し、それに応じて職業の分業も進み、細分化の進んだ領域単位に独特の発達・発展を遂げつつ、今日の科学技術文明を支えている。その過程で領域別に用語法を発達させ、常識や定義なども作り出し、共有するようになってきている。その当然の帰結として、専門間、分業間など領域横断的な情報共有の場において、まるで異言語間と同じように翻訳の必要性がでてきているのである。同一言語内では話せば通じるという誤解も大きく、うまく通じないと簡単に不信感につながりやすい厄介な問題を抱える。

つまり、安全の発想とリスクの発想という異言語間の理解のギャップばかりでなく、現代日

本社会では多領域横断型思考のギャップ問題も抱えている。こうした問題はどのように解決すべきなのだろうか。科学技術の長足の進歩・発展も大きな変動要因であるが、日本社会の在り方の劇的ともいえるほどの変化も劣らず重要な変動要因であろう。現代日本社会は、自らが選り取ったといえないところが心細いが、主権在民の民主主義社会である。それにふさわしい健全な議論のできる社会になっているだろうか。健全な安全議論もその枠の中で展開されるべきテーマの一つであろう。

しかし選挙権行使の関心も高いとは言えず、裁判制度もお白洲的雰囲気を出しているようにもみえない。公共の議論の場が形成・発達してきているとは言い難い。他方で、科学技術製品を大量に取り込み、生活スタイルは大きく変化し、かつて家庭内で行われていた仕事も分業化され、家族のつながりは一段と矮小化し、個人の立ち位置と安定性は大きく変化している。主権在民の民主主義にふさわしく議論を展開できる仕組みを改めて構築する必要があるだろう。

しかし健全な議論ができる枠組み整備にはかなりの時間を要することになり、とりわけ良くも悪くも長く固まってきた習慣や発想、行動習慣を変更する際には、かなりの時間を必要とする。そうした事情を考慮すると、なぜそうなったのかを客観的に眺め直す作業が、その前に必要になろう。

本論で取り扱うのはそのための安全関連語彙の受け止め方の歴史的変遷を明らかにすることであり、歴史的な特徴を理解したうえで、どのような新しい在り方が必要であるか、可能であるか、広く議論を巻き起こし、新しい時代にふさわしい安全の捉え方を確立していきたいとの主旨で研究テーマを位置づけている。

こうした目的や背景事情から、第一報として、本論では基礎語に「安全」の言葉を選び、具体

的研究方法として日本語を母国語としない外国人の手により発刊された三種類の日本語辞書を選択した。イエズス会編『日葡辞書』（1603）、メドハースト『英和・和英語彙』（1830）、ヘボン『和英語林集成』（1867）である。

本論の構成は第1章で方法論としての概念の利用等の意義についてとりまとめ、第2章では本論で用いる「安全」関連の語源や字源を整理し、比較尺度として利用する概念的特徴を明らかにする。第3章は外国人の手による辞書の特徴を整理し、第4章ではそれらを比較しながら、変遷の特徴等について検討する。

1.2 方法としての「概念」と「解説、定義」の区別

本論は言葉の検討であり、辞書類の解説等を直接の基本材料とする。しかし多種多様になりうる諸々の解釈の整理には、個々の解釈を位置づける何らかの尺度とそれに基づく体系的整理法が必要である。本論ではその役目を言葉の概念と語源、字源に求めている。この方法の利点を明らかにするために、辞書類の解釈や専門別の用語の定義と言葉の概念の関係についてその役割を明らかにしておく。

1.2.1 概念について

岩波哲学・思想事典^[3]では“概念：1. 西洋【概説】概念を表す西欧語の語源が「一つにして掴まれたもの（conceptum）」や「把握する（begreifen）」であるように、概念とは複数の事物や事象から共通の特徴を取り出し、包括的・概括的に捉える思考の構成単位を意味する。概念は一般に内包（意味内容）と外延（適用範囲）とをもち、その包括度に応じて上位概念と下位概念（たとえば類概念と種概念）とが区別される。表象や観念が心理的色彩を帯びているのに対し、概念はイメージよりも言語との結びつきが強く、非心理的かつ論理的色彩が濃い。概念が表すの

は〈個物〉ではなく〈普遍〉であるが、その存在身分をめぐっては中世において〈普遍論争〉が繰り広げられ、普遍は実在するのか単なる名前に過ぎないのかが争われた。”と解説する。

歴史的にみれば、概念について西欧中世の普遍論争や論理学上の定義などもあるが、本論では先に引用した基本的な特徴以上の深い概念論争とは無縁の用い方をする。その理由は、本論では、概念論自体の検討は目的ではなく、あくまで関係づけのための道具、補助的な尺度の役割にすぎないからである。同じ言語体系を用いていても、現実には専門分野別に異なる定義がつくられることも多く、解釈や説明内容に予想以上の違いのあることも少なくない。本来バラバラな関係であって当然のものなのか、それとも上手に関係性を見出すことができれば、ジグソーパズルのピースのように、適切に配置できれば全体として一つの意味ある絵図を完成させるものなのか、簡単には判別の付かない場合も多い。しかし安全問題といわれるものの多くは、それでも判別して物事を先に進ませる必要がある場合も少なくない。本論ではブレの少ない尺度を設定し、それを手掛かりに共通性と差異性の特徴を明確にする作業を通じて体系的整理を試みようとするものである。つまり基本材料の諸解説や諸定義の中に見出せる“共通の特徴”を本論では“言葉の概念”と称し、まず共通の特徴を明らかにすることによって、同一グループに属するか否かを判別し、そのうえで、差異性の特徴を活かす形の再分類化によって、第一次レベルでの総合的整理を実現しようとするものである。

こうした整理法によって、類似語間の使い分けを誰でもが手軽に的確に整理できるようになれば、語彙数を豊かにするメリット（詳細分析をより豊かにかつ間違いを少なくして共有しやすくする）につながり、語彙増大に伴うデメリ

ットである類似語の使い分けの混乱や誤解も最小限に抑えられると期待している。

1.2.2 共通の特徴の捉え方と字源・語源について

日本語に限らないが、多くの一般的な辞書類は用例から抽出した意味を用法別に解説する形式を採用している。すなわち用例用法にそった解説が中心である。その重要性について改めて指摘するまでもないが、別の言い方をすれば、そうした辞書の多くは先に指摘した言葉の概念について直接には取り扱わないということでもある。仮に、用法が一つしかなければ、その意味が言葉の概念とも言いうるが、長く使われてきた言葉であればあるほど、多くの用法が成立する。生きて使われる言葉であれば、時代や社会の変化に伴い、用い方が変わって当然だからである。しかしこれらをバラバラに捉えたままでは、総合的整理とはほど遠く、これからの応用の可能性を推理することも難しい。そのため言葉の概念を利用して筋道が見える整理を試みようというのである。

現代日本社会では多くの漢和字典類が出版されており、漢字の字源などを含む解説と同時に、当該漢字を用いた主に二字熟語をまとめて列挙し、その熟語の意味も解説している場合が多い。この編集スタイルは当該漢字の共通の特徴の抽出、ひいては言葉の概念の見当をつけるには好都合である。しかしそこまでの好条件が揃っていても、共通の特徴の抽出作業は厄介である場合も少なくない。

そのような時の次善の策が字源や語源の活用である。文字化するということは言葉の聴覚記号を視覚記号に置き換えることでもある。どのような意図で漢字（図形）が作られたかを調べることを、その字源を調べるという。実際にはそのような明確な意図が示されている場合ばかりでなく、使われ方の初期用法の解説である可能性も多いかもしれない。どこまで歴史事実に

遡って検討できるかは語源や字源の研究成果と深く関係する。しかし研究の目的はまとめ方の筋道を明示できる分類法、整理法の確立にもあり、言葉誕生時の意図を起点、現代用法を終着点とみなすことで、用法の変化を整理しようというものである。少なくともその逆の場合、すなわち現代的用法からその元を推論していく作業と比べれば、明らかに容易である。たとえば近現代になって類似語のように取り扱われる言葉も、その語源ないし字源に遡ってその特徴を捉え直すことで、用法の展開ポイントも推定しやすくなり、両者の違いに注目すれば、その特徴を活かして使い分けることも容易になろう。さらにいえば概念的特徴を外さない範囲で新たな用法を創出することも可能になる。

なお本論の中心は3章と4章にある。そのため2章の尺度としての基本語の漢字の字源と概念的特徴を明らかにすることについては、加納喜光『常用漢字コアイメージ辞典』（中央公論新社2011）^[4]の解説を借りることとした。つまり加納の漢字毎のコアイメージを本論では漢字の概念的特徴として扱う。字源のコアのイメージが概念とどういうものであるか否か、当然に議論はあるであろうが、先に述べたように、本論の概念を用いて検討する理由はいくまで総合のために必要な比較尺度としての利用にすぎない。そしてなによりも、本論の焦点は日本語「安全」の歴史的な受け止め方の変化にあり、概念抽出作業やその概念内容の検討を省き、加納のコアイメージに従って、その先の歴史の変遷の検討に焦点をおいている。

2. 安全関連語の概念的特徴について…尺度の設定…

2.1 漢字熟語「安全」の語源・字源からみた概念的特徴

諸橋徹次『大漢和辞典』^[5]には、漢語「安全」

を用いる文献として、後漢書の夏恭傳（426年）「兵凶戦危 非安全之道」と、顔氏家訓の風操篇（601-604年）「恭以恩信 為衆所附 擁兵固守 獨安全」の二例を掲載する。この事例は、戦いが想起される状況下で使われている言葉であるとまではいえよう。しかし、近代は別として、中国古典文献で見ると、「安全」は頻度高く使用されていた形跡はなく、この二つの事例で当時の「安全」の意味内容を語源に匹敵するレベルのものとして取り扱うにはためらいが残る。他方で、漢字の「安」と「危」を対語とした熟語「安危」の表現は古くからあり、今日でもつかわれている。古典文書の中で有名なのは韓非子「25 安危篇」^[6]であり、安術7つ、危術6つを解説する。また、対句の形では「無危則安、無損則全」がある。たとえば行政院飛航安全委員会100年に「無危則安、無損則全」是飛航安全的基本觀念”の記述がある^[7]。「安全」を「無危で無損」つまり「あぶなげなく、損しない、すなわち欠けないこと」と解説している。また、マカオの都市計画のパンフレットの表題にも「無危則安、無損則全、構建安全城市納入五年規画」とある^[8]。しかし同文中には周易繫辭下伝の「安而不忘危、存而不忘亡、治而不忘亂」も掲げる。そうだとすれば、「安全」は「危険が無いこと」と単純に同じ意味だろうか。「安」と「危」は対の関係であるとしても、「安全」と「危険」も同じような対語の関係といえるのだろうか。

更にいえば、「あんぜん」という漢字の音訓みからも推測しやすいが、「安」や「全」それぞれに和訓はあるが、二字熟語「安全」に対応の和語は何なのだろうか。漢字文化との接触以前に、「安全」に匹敵する観念は無かったのだろうか。

こうした諸問題の理解の糸口求めて検討するのであるが、そのためには熟語「安全」に手がかりを見つけにくいので、基本の言葉の特徴を

「安」と「全」とに分け、各々の字源的特徴を明らかにし、それを本論で行う比較のための一つの尺度とする。

2.1.1 「安」のコアイメージと字源的特徴

漢字「安」についての加納のコアイメージは「(上から下に押しえて) じっと落ち着く」である。ある場所にじっと落ち着くことを意味する古代漢語が*・anであり、この聴覚記号を視覚化したのが「安」であるという。「動きのある物を押しえて止めて、ある場所にじっとさせておく」が「*・an」のコアにあるイメージであり、「女+宀」により、女が家の中に腰を落ち着けて居る状況の図形をつくり、安らかに落ち着いている様子を暗示しているという。「安危」の熟語もあるが、「危」のコアイメージは「バランスを崩して傾く」であり、「安」の「(上から下に押しえて) じっと落ち着く」とはまさに対照的な不安定さを意味する言葉である。

具体的な動詞用法は、漢辞海^[9]によれば「① やすんずる・ヤスズ：㊦ 落ち着かせる 例：修己以安百姓 自己を修養して民衆を安定させる（論語 憲問）、④ だめる 例：在安民（政治の要は）民をだめることにある（書 臯陶謨）㊵ 孝養をつくしてやすらかにする 例：老者安之 老人には孝養をつくしてやすらかにさせる（論 公冶長）㊶ 養生する。養う 例：衣食所安 衣食は養生するためのものである（左・莊 10）㊷ 置く。配置する 例：先安筆硯対溪山 まず筆と硯を置いてから溪山と対面した（陸游詩・東陽道中）」であり、形容的用法は「① やすい・ヤスシ。㊦ 気楽にのんびりしたさま。例：悠悠舒而安 悠々としてのんびりで気楽である（韓愈・詩・南山）名詞化は略、④ おだやか。平穏なさま。例：白日即安 昼間は穏やかである（王度・古鏡記）㊵ 無事であるさま。対語「危」。例：是以身安而国可保也 ゆえに身は無事で国家は維持できる（易 繫辭下）」である。日本語

的用法として「①容易である。日本語の「やすし」には「たやすい」の意味もあることから、「安」の字を当てたもの。②価格が低い。近世以降の用法」との指摘もある。

これらの解説全てに共通する表現なら“心身ともに穏やかにゆったりと落ち着き安定している様”になるだろう。これなら、「なだめる」も「孝養を積む」も「養生する」も含みうる。しかしそれをさらに共通するギリギリの特徴に絞れば「じっと落ち着く」となろう。漢字「安」を用いるところには最低限この特徴があるということになり、本論ではこの特徴を「安」の概念的特徴と捉えることにする。

2.1.2 「全」のコアイメージと字源的特徴

漢字「全」のコアイメージは「欠け目なくそろろう」であり、元の漢字は「入+玉」で、象嵌などの工作の際、びっしりと玉をはめ込む場面を設定した図形である。この意匠によって、欠けた所がなく、すべてにわたって揃っていることを意味する古代漢語*dziuanを表記する^[4]。そこで本論では「全」の概念的特徴を「欠け目なくそろっていること」とする。

2.1.3 「安」と「全」の組み合わせの特徴

漢字熟語は置かれた文脈により、形容的に理解することも、動作的に理解することも可能であり、文脈の中に位置付けてはじめてその意味は定まる。たとえば和語の読み替えでも同様であり、「安国」なら「国を安んずる」とも、「安らかな国」「安き国」とも読める。どれが適切な訳かは文脈による。

「安全」の場合、「全」を共通にする「完全」「保全」という、現代ではかなり似た場面で用いる熟語群がある。たとえば、「完」のコアイメージは「丸く行き渡る」であり、家の周囲を丸く垣をめぐらす場面を設定した図形であり、全体に行き渡って欠けた所がないことを意味する古代漢語*fuanを表記する。全体は「○（円形）」

のイメージで捉えられ、「全」と同様に「欠け目がない」というイメージも生ずる^[4]。しかし未完は「まだ終わらない」であり、「完璧＝壁を完うする」は、趙の国の藺相如が交渉相手の秦から命がけで「壁」を守って帰国した故事に由来し、「壁を完うして帰る」の意味に由来する。中国では「完璧帰趙」（元のままの壁が趙に帰る）と四字熟語で用いる^[24]。つまり「完全」は欠けることなく全部を無事にやり終えた意味となる。

「全」が空間的な「欠け目無く揃っていること」にウエイトがあるとすれば、「完」には経過的な時間的要素を含む「欠け目無く終わらせる」ことを問題にするのであり、終わってみれば「完」も「欠け目無く揃っていること」は「全」と変わらない。これに対して「保」のコアイメージは「（周りを囲んで）大切に守る」で、図形としては赤ん坊にむつき（襦）当てている状態であり、襦の原字である。それが転じて物を取り囲んで大事に持つ、あることについての言質をしっかりと守る（責任をもって請合う）などの意味が実現される^[4]。

この「完・保・安」の特徴を強調して熟語の特徴を言い直せば次のようになる：

- 「完（全）」…欠けや漏れなくやり終えたことを意味する
 - 「保（全）」…しっかりと囲って欠けることのないように大切に守ること
 - 「安（全）」…すべてのものごとを（漏れなく、欠けることなく）落ち着くようにすること
- つまり「安全」を「保全」や「完全」と比べてその特徴をあらわす和訓は「全を安んずる」がぴったりするといえよう。

2.2 英語「safety」「security」の語源的特徴と概念

2.2.1 「safetyとsave」と「securityとsecure」の語源的特徴

英英辞典類には単語の解説のほかに発音解説と語源解説を簡略記号化して掲載するものが多い。文章形式ではなく略号を多用した簡略様式であるのはできるだけ短く表現するためである。日本で発売されている英和辞典類も、簡易版でなければ、英英辞典類と同様の簡略様式のまま掲載しているものが多い。つまり専門的な語源辞典などを用いなくとも、基礎的な語源の特徴は簡単に学ぶことができるように工夫されている。英語を母国語とする人々にとっても、単語の用法の多様性を合理的に把握しようとすれば、語源は役に立つ知識だからである。その点では漢和辞典が意味の解説や関連熟語のほかに字源についても掲載しているのと同じである。例えば、次に掲げる「safety」と「security」等の語源の解説は研究社の英和辞典の語源解説を利用したものであり、略号を普通の言葉に戻し、分かりやすく意味の解説と併せて書き直し再整理したものにすぎない。

英語「safety」の語源はラテン語 *salvum* (= uninjured), さらに *salvus* に遡る。「uninjured」は「損われていない、傷害をうけない」である。これと同じ語源をもつのは、*save* (vt.) 「《危険・災難などから》(人・生命・身体・国家・財産などを) 救う。救助する。助ける。救い出す」や、ラテン語 *salvare* に遡ることのできる *salvage* (vt., n) 「《難船、略奪、火災などから》(船、船荷、家財などを) 救い出す、救助する、沈没船を引き上げる [医学] 救命する / 海難救助, サルベージ (海難した船舶や貨物の救助), 引揚作業, 救助された船舶), [医学] 救命」がある。この特徴から見る限り、自力であれ他力であれ、結果として、まるまる傷つかない状態で、脱出、

救助あるいは救出、確保できていればよいことを意味する。

英語「security」はラテン語 *secūritās, secūrus* に遡り、これは「secure」の語源と同じであり、言葉の構造的特徴は「*sē-*(= without) + *cūra* (= care)」である。つまり心配の要らない状態を指し、そういう状態を実現できる手段や工夫に関心を寄せることに係る言葉である。そのため安全保障、保証、担保、确实、心丈夫、確信、安心などの訳にも、また有価証券などの訳にもなっていく。

2.2.2 「safety」と「security」の対比的特徴

野球ゲームでは「safe」と「out」を対として使う。「safe」と判定されればゲーム上に生き残っていることを意味し、「out」なら直ちにベンチに戻る、すなわち、ゲーム上は死んだのである。「all or nothing」の単純なルールであり、「out」でなければ「safe」であり、「safe」なら「out」ではないという、誰にも分かりやすい判定基準である。しかし現実世界は「all or nothing」で物事を仕分けるにはあまりにも複雑な場合が多く、ギリギリに「safe」といいうる条件や状況を考えざるをえない。つまり、ある範囲までしっかり守り抜くことができれば「save」したことにするとの基準をも設定せざるをえないことが現実には少なくない。色の分類で言い直せば、黒色・白色という明快な黒白分類の他に、その中間領域に灰色領域(グレーゾーン)という中間的幅、つまり黒白つけ難い曖昧な領域を設定せざるをえず、しばしば基準線をその領域内に置かざるを得ないのが現実である。

この特徴を自動車の衝突事故の事例で言い直せば、衝突事故は起こさないに勝るものはないが、しかし不運にも衝突事故が起きて自動車自体は破壊されたとしても、もし運転手を含む車中の人々が、大した怪我もせず助かるとすれば「safe」と言ってもよいかもしれない。この

“不幸中の幸い”的内容境界をどこに置くかとの問題ともいえる。つまり何を基準に「safe」と「out」の線引きをするかにかかってくる。溺れた人を見てから浮き輪を投げても、溺死を免れるかもしれないし、強盗団に遭遇して身ぐるみはがされたとしても、警察官が盗られたもの全てを傷もつけずに取り戻してくれるかもしれない。しかし自動車事故なら、衝突の一瞬で被害結果、つまり「out」か「safe」が確定してしまう場合も多いだろう。もし事前にシートベルトの着用や、エアバッグの装備などがあれば、万一の場合でも「safe」になり得る場合も出てくる。つまり対策のタイミングが事故発生の前か後かの尺度ではなく、絶対に守ると決めたものはどんな過酷な状況に変化しても守りぬくとの尺度で講ずる対策タイプを「safety」型の対策の特徴と整理することができる。

これに対して、そもそも事故自体を起こさない工夫を「security」型の対策の特徴と整理できる。現代なら衝突防止装置はこの工学的工夫の一つとなるが、自動車側の工夫ばかりが対策ではない。たとえば、“警備中”の看板を掲げて置くだけでも泥棒をたくらむ不心得者の発想を思いとどまらせる効果があるといわれる。こうした活動の組織を警備会社 security company ともいう。

“見通しがよく”しかも“居眠りのしにくい道路設計”とか、慎重な運転技術を要求するような箇所には適切な注意喚起の看板やミラー、信号等々を整備したり、さらに自動車の流れをスムーズにする信号システムの調整や、混雑緩和のために複数の迂回路等々を整備したり、さらに運転手のモラルが確実に高ければ、自動車事故件数は激減すると期待できよう。このような“そもそも交通事故自体を起こし難くさせる諸対策”，つまり厄介なことにならないようにする対策が「security」型対策の特徴である。別な言

い方をすれば、ごく常識的にルールを守って行動すればトラブルには遭遇し難い生活システムあるいは生活習慣の確立とも言える。こうした展開に貢献する対策が「security」型対策と整理することができる。この「ごく常識的にルールを守って行動すれば」は当該社会の精神文化や治安を含めた社会的安定性と深く関係し、そのための具体的な「security」型対策は社会によって、同じ社会でも時代によって、異なる内容にもなりうる。

3. 辞書類にみる安全関連語の解釈と歴史的变化について

3.1 イエズス会の『日葡辞書』（1603）

3.1.1 辞書の特徴

イエズス会の日本での活動は1549年に宣教師フランシスコ・ザビエルが初来日して以降のことであり、『日葡辞書』はこの活動にかかわった宣教師たちが後進の宣教師の日本語学習に役立つために作成した辞書である。1603年に本篇、翌1604年に補遺が成り、ともに長崎の日本イエズス会コレジオで印刷刊行された。布教活動という関心幅に限定はあるものの、庶民層と支配者層の両層の悩みを聞きとり、信仰に導く話ができる程度の日本語力を宣教師たちは必要としていた。両層の話し言葉を中心に約32,000語が収録されている。

この辞書は外国人が受け止めた16世紀後半の日本語の使い方、当時の意味を示す貴重な辞書でもあり、日本語の歴史的变化をみる際の重要な手掛かりともなる辞書である。とりわけ世上の安定しない戦国時代の織豊期に言葉を集めた辞書であり、現代まで使われている「安全」「危険」関連語も数多く収録されている。

この辞書の見出し語はすべて日本語であるが、表記法はイエズス会式のローマ字であり、そのアルファベット順に編集されている。なお、『日

葡辞書』(1603)の日本語訳版として、補遺も併せて編集した土井・森田・長南編訳『邦訳日葡辞書』岩波書店(1980)^[10]が刊行されており、本論はこれを用いて検討している(以後、特に歴史的原本の特徴を問題にしない限り、『邦訳日葡辞書』を単に「日葡辞書」と簡略表記する)。なお本論でもイエズス会式ローマ字綴りで記している箇所も一部あるが、論文の分かりやすさのために、その表記を特に必要としないと判断したものについては漢字を含めた現代日本語表記に直した。直接ポルトガル語から検討していない点で、また発音に分かりやすさのために漢字を当てはめる点(基本的に翻訳版に従う)で、未検討課題は残るにせよ、江戸末期～明治期にかけての辞書類との比較には欠かせない辞書と判断した。

なお歴史的に詳述すれば、この日葡辞書(1603)の前に『ラポ日対訳辞書』(1595年、天草刊、ラテン語・ポルトガル語・日本語対訳)が出ているが、こちらは入手困難のため、今回の検討から外した。

また、日葡辞書(1603)の構成は日本語の見出し語に関してポルトガル語の解説がつくといいだけではない。「日葡辞書では漢語を挙げれば

先ず日本語の訓による説明を付し、また、それに代わるやさしい日本語による説明や同義語をしめすことにつとめた」^[11]森田, p.385)とあるように、基本は和訓とポルトガル語の二段階の解説である。しかし安全関連語に限って言えば、和訓解説がつくのは半分くらいである。

3.1.2 掲載の語彙と解釈

3.1.2.1 基本語「安全」等

表1は日葡辞書における安全の基本関連語の解説をまとめたものである。比較のために現代用法(広辞苑第7版2018)^[1]も添えている。この二つの解釈の間には415年の時間差がある。

日葡辞書における「安全」の読み方は「アンセン」であり、和訓記載は無く、その解説は「平和で無事平穏なこと」である。さらに「安」の和訓「ヤスンジ、ズ、ル(安んじ、～ず、～る)」も見出し語になっており、その解説は「平穏に統治し、支配すること」である。この用例には「クニヲヤスメ、イエヲヤスンズルコトハヒトヲエレバナリ(国を休め、家を安んずることは人を得ればなり):国をよく統治し、家を円滑に管理し支配することは立派な家臣を得ることからくるのである」を挙げる。また、「ヤスンジ」た結果状態が「安全」の中味、すなわち“平和で

表1 日葡辞書における安全の基本語の解説および現代解釈

見出し語		解説	現代解釈《広辞苑(第7版2018)》
Anxen	アンセン (安全)	平和で無事平穏なこと	【あんぜん】安らかで危険のないこと。平穏無事。/物事が損傷したり、危害をうけたりするおそれのないこと
Yasunji, zuru	ヤスンジ, ズ、ル(安んじ、 ～ずる)	平穏に統治し、支配する	【やすんずる】(ヤスミスの音便)(自サ変)安らかになる。平安になる。安心する/それに満足して不満に思わない。甘んずる(他サ変)安らかにする。安泰にする
Yasui/ yasū	ヤスイ(安い)/ ヤスウ	①容易である(もの)、また ②安価である(もの) / ~に	【やすい(安い、易い)】《安》悩みがない。心のどかである/《安》安心だ/平易である。容易である。簡単である/かるがるしい/《安》(廉とも書く)品物の量や質のわりに値段が低い/《安》男女の間柄を羨望しからかう卑語/ (他の動詞について) そうなりがちだ
Yasuracani	ヤスラカニ(安らかに)	副詞 容易に	【やすらか(安らか)】おだやかで無事なさま。安穩/ゆったりとして気楽なさま/心にかかることのないさま。安心できるさま/たやすいさま。やすやす

無事平穏なこと”と受け留めて違和感のない解説となっている。いずれも漢字「安」のコアイメージ「(上から下に押さえて)じっと落ち着く」がその基礎にあると推理できる解説である。

イエズス会が辞書作成を意識して言葉を集め、整理していた時期の日本社会は、戦国時代でもとくに織豊期に当たり、天下統一を狙う者が始まったものの、下剋上の世でもあり、支配層(主に武士層)たちにとって油断できない緊張感の高い時代であったろう。そう考えると、「平和で無事平穏なこと」と解釈する「安全」の内容は当時の立場の違いを超えて誰でもが望む内容とも考えられるが、動詞形「ヤスンズル：平穏に統治し、支配すること」を用いる人々となると実質的には支配者層に限られよう。一般庶民にまで普及させる言葉でないとしたら、分かりやすい和語になおさず、原語のまま音訓みで受け止めていても不思議ではない。したがって「安全」や「ヤスンズル」の言葉は支配者層の言葉といえそうである。

この解釈の弱点は漢字二字熟語のうち「全」の意が希薄なことである。この時代でも「全」を和訓「マタシ」、とりわけ“欠けない”意味で用いていた時代であるだけに、なぜ「安全」に和訓表示が無く、しかも「全」の意味が解釈に反映されていそうにない問題は残る。一つ考えられるのは、この時代の支配者層にとって統治対象は自明、つまり自らの領地の民か、天下統一を目指す者なら天下の民であり、彼らを平穏に統治し、支配することこそ、支配(層)の野望、あるいは使命と受け止めるのは自然な成り行きに見える。つまり敢えて明示的に「全」を訳すまでもなく、当時の人々には十分に通じる内容、との解釈である。

また次の「ヤスイ」「ヤスラカニ」の見出し語にも疑問が残る。その解説は「容易である(もの)、安価である(もの)」「容易に」と簡単な記

載にとどまり、現代的な「ヤスイ、ヤスラカ」の意味(心のどかである、穏やかである等々)の解説がない点である。そうした解釈の漢字熟語が日葡辞書当時にも無かったわけではないからである。その確認が次節の検討であり、表2、3、4である。

3.1.2.2 「安」語頭の二字熟語からの検討

表2は日葡辞書に掲載の「安」語頭の二字熟語22語の一覧表(表1の「安全」は含まず)である。和訓表示有りには★を付し、「」内に和訓を示し、コロン(:)以降がその解説文である。ちなみに和訓の表示有りは15語、表示無しは「安全」を含めれば8語である。用例が挙げられているものについては、原文はローマ字綴りの日本語表記であるが読みにくいいため、本論では漢字交じりの平仮名表記とした。なお解説の中で「または」は意義や用法上は同価値と認められる類語を示し、「すなわち」は同義語であるが、この場合は言い換えられている語の方が平易で親しみやすい通俗語が記され、そちらの使用を勧めている。その判断基準は特に明示されていないが、宣教活動にあったと思われる。また、表2の最後に「安」の熟語ではない「無事」を敢えて追加掲載している。その理由は「安全」と意味内容が近く、見出し語にもなっているためである。ちなみに現代では「無事」と似て使われる「無難」は見出し語にも解説用語としても、関連用語検索の範囲内ではあるが、一度も目にしていない。

さらに、表2の熟語群の解説用語に注目すると「平和、平穏、無事、静穏」解説グループ(8+1語、表3)と、「やすらか」解説グループ(11語、表4)に大別できる。なお「安危」「安否」「安置」を除外しているため、実際には合計20語の整理である。この整理から指摘できることは、「安」語頭の二字熟語に限定しているものの、「易い：容易である(もの)」に該当する熟

表2 日葡辞書における「安」語頭の二字熟語の解説と現代的解釈

見出語	日葡辞書の解説	広辞苑解説 (7版)
安心	アンジン：それぞれの宗派における霊の救済方法に関する根本眼目であって、各人がそれぞれ自ら悟ったり、修得したりするもの。 / [これがわが宗のあんじんなり] すなわちこれがわが宗の教法の目的であり眼目である。 / 心が迷い疑うことなく安らかになること	「あんじん」は仏教用語として日葡も引用。 「あんしん」は心配・不安がなくて、心が安らぐこと。また安らかなこと。
安身★	アンシン「やすきみ」：無事平穩にしていること	
安然	アンネン：安心、内面的な安らぎ 【文書語】	僧の名として掲載 【「晏然」(あんぜん)】 やすらかなさま、落ち着いたさま。
安世・安盛★	アンセイ「やすいよ」すなわち無事な時代：平和で静穩な時代、また(安盛)：平和で繁榮すること 例 無事安盛	
安穩★	アンノン(アンヨン)「やすくおだやかなり」：穩やかで平和なこと	安らかにおだやかなこと。無事
安泰	アンタイ：平和と静穩と	やすらかなこと。無事なこと
安閑★	アンカン「やすくしずかな」：平和、あるいは、静穩	落ち着いたのんびりしているさま。何もせず気楽なさま。
安置★	アンチ すなわち「そなえおく(供え置く)」：仏の象とか絵像とかのようなものをある場所に置くこと。 / [御影を安置する]：絵像を祭壇に置く	ある場所に据えておくこと、特に神仏の像や遺骨・位牌などを据え置いて祭ること。
安国	アンコク：静穩で平和な国	① 国家を安穩にすること。 ② よく治まっている国(日葡)
安寧★	アンネイ すなわち「しずかな(静かな)」：平和、外面的な平穩無事 【文書語】	(史記秦始皇本記「天下に異意無きは則ち安寧の術也」)世の中が穩やかで平和なこと。安泰
安堵	アンド：以前からの望みを達したことから来る安心 / 以前に自分が所有していた本来の領地に戻る。 / [安堵する、または、本領に安堵する]：自分の本来の領地に帰される。 / [安堵の思いをなす]：心が静まり安心する	(堵の中に安んずる意) ① 居場所に安住すること。② 安心すること。③ 鎌倉～江戸時代、幕府・領主などが支配下の武家・社寺の所領の知行を保証し、承認すること。旧知行地をそのまま賜ること。
安坐★	アンザ「ごをやすんずる」：気楽にくつろいで坐っていること。例 [安坐する]：同左	7版には記載無し 6版は落ち着いた座ること、特に胡坐を組むこと。 / 安閑としていること
安宅★	アンタク「いえ(宅)をやすんずる」：安らかに家に居ること	7版には記載無し 6版は【安宅正路(孟子の言葉)】の解釈
安居★	アンキョ又はアンコ「やすくいる」：静穩で安らかなこと	① ころを安らかにして暮らしていること ② ⇒あんど(仏教用語の解説)
安住★	アンジュウ「やすくすむ」：ある場所や官位などについて落ち着くこと	① 安んじてとどまること。落ち着いた住むこと。② 向上心なく、その状態に満足する事
安楽★	アンラク「やすくたのしむ」：満足と安心と	心身に苦痛がなく楽なこと
安臥★	アンガ「やすくふす」すなわち「ころやすうねること(心安う寝ること)」：安らかに眠ること	楽な姿勢で寝ること
安枕★	アンシン「まくらをやすんず」すなわち「やすくいぬる(安く寝ぬる)」：安らかに眠ること	
安危★	アンキ「やすし、あやうし」：安全と危険と / 疑わしくて不確かな首尾	安全か危険かということ。
安否★	アンブ「やすしいなや」：物事の首尾が確かなのか、不確かなのか、または疑わしくて不確かな首尾 / 物事が真実なのか、虚偽なのか / (あんぷにまかする(安否に任する))：自然の成行きに任せる	無事かどうかということ。
安怡	アンイ：安息と喜びと	

見出語	日葡辞書の解説	広辞苑解説（7版）
無事	ブジ：平和，静穩 /〔無事に榮ゆる〕：きわめて平和で静穩な状態である。 /〔無事に属する〕：静穩になり，平和になる /〔無事安閑〕：同左	① 取り立てて言うほどの変わったことのないこと ア) 事変のないこと，危険・災害・大過などが起こらない状態。 平穩。 イ) つつがないこと，健康なこと ② 自然のままでも何も人為を加えないこと ③ ひまなこと。 なすべき事がないこと。

語の掲載は無く，また「安価」関連の熟語も無いことである。もっとも現代でも「安」語頭の二字熟語で「容易，安価」関連の解説の付く熟語自体が多いとはいえない。また「ヤス〜」と読むとき，安価や容易の言葉が増えてくる程度であり，見出し語の解説も簡単であることと併せて推測すれば，16世紀後半の社会では「易い」や「(価格が)安い」を意味する用法は既にあったようだが，頻用されるほどの熟語は使われてはいなかったようにみえる。この点については古語辞典類を用いた和語の検討にゆだねる。

表3は「平和，平穩，無事，静穩」グループの熟語を左欄に列挙し，各語の解説用語に「○」を付したものである（用語の関係は“and関係”を原則とし，その他の“言い換え関係”には「/」，orか並列か不明の場合は「，」を付した）。

その目立つ特徴は「安身」以外は「平和」の解説用語が含まれる点である。しかも見出し語「無事」の解説用語も「平和，静穩」であり，「安身」にも「無事」の解説がつくことから，間接的に「平和」を含意しているともいえなくもない。つまりほぼすべてに「平和」の解説がつくのが特徴である。それと対照的なのは，参考に付した該当語の現代解釈の中では「平和」の言葉は出てこない点である。さらに広辞苑「安国」の見出し語では「②よく治まっている国（日葡）」と記述しているが，その根拠にした日葡辞書には「静穩で平和な国」と記載されている。内容的にずれのある解説ではないものの，表記語に注目するなら，敢えて「平和」の語を避けてい

表3 「平和・平穩・静穩・無事」の解説グループ

解説言葉 二字熟語	平和	平穩	静穩	無事
安全 a	○	○		○
安身 a★		○		○
安寧 a★	○，	○		○
安泰 b	○		○	
安閑 b★	○/		○	
安国 b	○		○	
安世 b★	○		○	/○
安穩 c	○	○		
安盛 c	○			
無事 b	○，		○	

るようにさえみえる。

「平和」は社会的な広がり暗示する言葉である。そのため個々人の「身」を修飾する時には「平和」の語は似合わず，むしろ「無事」「健康」「大丈夫」くらいの言葉が用いられる。また「ヤスズル」の解説には直接に「平和にすること」との表記はないが，「平穩に統治できていること」が社会レベルで見れば「平和であり」「平和にする行為」と解釈してもいいのだろう。つまり「ヤスンジた行為結果」を平和と観念していたといえるかもしれない。しかし日葡辞書の見出し語としての「ヘイワ（平和）」は無い^{註1}。それを併せて考えると，平和という観念を抱くのは訳者の解釈でなければ宣教師たちの解釈ということになる。当時の社会状況を考えれば，支配者層の危機感と宣教師たちの危機感とでは内容は違うにしても，緊張の強い時代であったことは想像に難くない。現代からみると，この

時代の「安全」や「ヤスンズル」に込めた「平和」への思いが相対的に強烈な印象を与える。

見出し語「ブジ buji (無事)」は「平和, 静穏」と説明し, 用例には「Bujini sacayuru (無事に栄ゆる) きわめて平和で静穏な状態である」「Bujini zocusuru (無事に属する) 静穏になり, 平和になる」「buji ancan (無事安閑) 同上」を掲げるが, 「無難」の見出し語は無い。また現代日本社会では, 無事を「平和, 静穏」とする解釈はみかけない。

表4は解説用語が「やすらか」解説グループの一覧表である。ただしここで指摘する「やすらか」は日葡辞書の「やすらかに: 容易に」ではなく, 現代用法的「やすらか」の内容の語群である。このグループは更に「安心」タイプ(a), 「やすらか」タイプ(b), その他タイプ(c)にも整理できそうであるが, 本論ではこの整理法は扱わない。この表4の熟語群が示唆しているのは, 16世紀後半の社会でも現代的な意味の「やすらかに」と解釈する熟語が結構あるということである。それにもかかわらず「ヤスラカ」の解説を「容易に」としか解説しない解説に戸惑いを

感ずる。一対一に対応する言葉がなく, 和語「ヤスラカ」の意味をポルトガル語に翻訳する段階で十分に受け止められなかった可能性があるのか, あるいは, ポルトガル語を日本語に翻訳する際に不十分な点があった可能性が考えられる。いずれにしても「ヤスラカ」は文脈により多様な訳がありうるから, これを一語のポルトガル語で表現することの難しさは想像に難くない。そしてこの表4があるからこそ, 表3の解説の「平和で」が相対的に一層印象的にもなる。

追補しておきたいのは「安」語頭の熟語ではないが, 「ココロヤスイ (心安い)」の見出し語の掲載があり, 「安心している。心配がない」と解説する点である。また「ヤスメ, ~ムル, ~メタ (休め, ~むる, ~めた)」の見出し語では「休止させる, あるいは, 休息させる」と解説したうえで, 事例の一つに「キラヤスムル, または, ココロヤスムル (気を安むる, または, 心を休むる): 何か苦しみがあつたのが静まる。」と解説する。つまり当時の庶民の言葉としては少なくとも現代でいう「安心」の言葉は「心安い」か「心休むる, ~める」を用いていたであろうと推測できる。

表4 「やすらか」解説グループ

熟語	解説
安然 a	安心, 内面的な安らぎ
安堵 a	以前からの望みを達したことから来る安心 / 以前に自分が所有していた本来の領地に戻ること
安楽 a	満足と安心と
安坐 b	気楽にくつろいで坐っていること
安宅 b	安らかに家に居ること
安居 b	静穏で安らかなこと
安臥 b	安らかに眠ること
安枕 b	安らかに眠ること
安怡 b	安息と喜び
安心 c1	宗派における霊の救済方法の根本眼目であり, 自ら悟ったり, 修得したりするもの /
安住 c2	ある場所や官位などについて落ち着くこと

3.2 Medhurst の『英和・和英語彙』(1830)

『華英字典』(1842) 『英華字典』(1847)

3.2.1 辞書の特徴

日葡辞書と似たレベルで日本語について解説している入手可能な古い辞書となると, 標題の Walter Henry Medhurst (1796-1857) (以後メドハーストと表記) による『英和・和英語彙』1830年(バタビア発行)^[13]になる。彼はロンドン生まれの会衆派イギリス人宣教師で, 中国学者, 出版人でもある。最初印刷工としてロンドン伝道協会に参加して1817年マラッカに赴任し, ウィリアム・ミルンの助手となる。中国語雑誌「察世俗毎月統記伝」発行の手伝いから始

め、1819年には牧師按手を受け、主にペナンとバタビアで宣教活動を行う。1822年ミルンの死後はメドハーストがバタビアに開設した印刷所がロンドン伝道協会の中心的印刷所となる。アヘン戦争後に開放された上海に入った最初の宣教師でもあり、以後この地で活躍する。バタビアにあった印刷所を上海に移したのが墨海書館（The London Missionary Society Press）であり、宣教用の書物のほかに西洋の政治・科学などの書物を中国語に翻訳して出版した。中国名を麦都思（Mài Dūsi）と称し、中国語訳聖書の翻訳・改訂・出版に尽力した。ちなみに中国古典『書経』を原書から直接に英語に翻訳している（1846）^[14]。

彼は翻訳・印刷にかかわる仕事の中で中国語をマスターしたばかりでなく、多くの言語をマスターした語学の天才でもある。彼自身は一度の来日経験もなく、また日本人について特別に日本語を学んだわけでもないとされているが、20年近く活動したバタビアで入手した大量の日本の書籍から日本語をマスターし、ここで取り上げる『英和・和英辞書（An English and Japanese, and Japanese and English vocabulary）』を作り上げた。世界初の英和・和英辞書でもある。基礎とした大量の日本の文書類については、“バタビアの東インド会社の日本語文献、特に中津藩主奥平昌高の『蘭語訳撰』を研究して編纂したとある^[15]。奥平昌高（1781-1855）は蘭学に熱心な江戸時代後期の大名であり、蘭語会話も自由にこなし、シーボルトとの交流も深く、文化7年（1810年）に『蘭語訳撰』、文政5年（1822年）に『バスタールド辞書』を出版するなど江戸後期の西洋文化・科学導入に多大な役割を果たした人物である。『蘭語訳撰』はこの奥平昌高の命により編集された日本語-オランダ語の辞書であり、『中津辞書』とも呼ばれる。この辞書は節用集に模してイロハ順に配列、各項目をそ

れぞれ天文、地理等19門に分類し、約7,000語を収録している。オランダ語の読み方の表記はない^[16]。なお本論では彼の『華英字典』（1842）^[17]と『英華字典』（1847）^[18]も併せて比較検討の素材とした。

英和の部の前半では約5,400語を扱っているが、英単語を主題別に分け、さらに細分項目に分けて整理している。後半では品詞別に英単語を整理している。和英の部では約6,500語の日本語の語彙をイロハ順に配列している。

失敗しやすいといわれる熱帯での石版印刷であったこと、適さない用紙しか入手できず、さらに英語も日本語も解さない職人の手によるものであったため、結果的に綴りに間違いが多いとされる。しかし中国語に造詣の深い著者の辞書でもあり、日本にも大きな影響を与えている。フェートン号事件（1808年）を契機に幕府は国防上の必要から、オランダ通詞に英語研究を命じて英語研究は始まっていたが、ごく限られた人々によるものでしかなかった。そのため『英和・和英語彙』の発行は日本でも注目され、1855年（安政2年）村上英俊が一部を『洋学捷徑英訓弁』として翻訳出版し、1857年『英語箋前編』3冊、1863（文久3）年同後編4冊として全体を翻訳している^[19]。

本論で用いたのは加藤知己・倉島節尚編著『幕末の日本語研究… W.H. メドハースト英和・和英語彙…複製と研究・索引』三省堂（2000）^[13]である。

3.2.2 掲載の語彙と解釈

3.2.2.1 基本語「安全」等

解説語は英語であるものの、安全関連語の数は少なく、その多くが単語一つ程度の解説にとどまる。それらをまとめたのが表5である。なお「安心」の見出し語はないものの、「不安心」の見出し語があり、また「安」は付かないが「無事、無難」の見出し語もあるので、併せて掲載

している。

表6は、英和の部および英華字典における「safe」「secure」に関するメドハーストの解説を一覧表にしたものである。共通の訳語も多く、たとえば「安穩、安当、穩当」「ヤスシ」は両方の解説、訳語に出てきており、「safe」と「secure」の使い分けは明快に描き分けられてはいない。

表7はメドハーストの華英字典における「安」「穩」「全」及びその関連熟語の解説をまとめたものである。なお検討不要の熟語の英語説明は省略している。事例の中に「安全」の熟語を見つけることはできなかった。

3.2.2.2 解釈の検討

メドハーストの辞書作成時に参考にした日本語の中心的な文献が『蘭語訳撰』（1810）であることも考えあわせると、その日本語は18世紀後半から19世紀初頭あるいは19世紀前半までのものと考えてよいであろう。そうすると、日葡辞書とメドハーストの辞書との時間差は約200年になる。用法に違いがでて当然であるが、「安全」は「アンセン」と発音するところは日葡辞書と変わらないが、「well, a recovery」と解説する。解釈の幅の大きな言葉を二つ用いるだけの説明であり、ここから何かを直接引き出すことは難しい。

表5 『英和・和英語彙』における「安全」の基本語と関連語の解説

見出し語（和英の部）			解説
アンセン	安全	An-sen	well, a recovery
ヤスンズ		ya-soon-zoo	to protect
ヤスシ		Ya-soo-si ①	brotherly, fraternal
ヤスシ		Ya-soo-si ②	calm, safe, secure, well
ヤスシ		Ya-soo-si ③	ignoble, base, low
ヤスシ		Ya-soo-si ④	cheap
アンザ	安坐	An-za	to sit at ease
アンシンシル	安寝	an-sin-soor'	to lie still
ファンシン	不安心	Foo an sin	uneasy
ヤスモノ	安物	Yas' mo-no	base goods
ブジ	無事	Boo-zi	no matter, nothing
ブナンニ	無難	boo nan ni	safe

表6 「safe」「secure」に関するメドハーストの解釈

英単語	『英華字典』1847	『英和・和英語彙』1830（英和部）
Safe	安穩、主固、安妥、定妥、安寧、安当、極妥、妥当、穩当 / far from safe 狼不穩, place of defense 庠、慶, safe-guard 衛所 safely guarded, 鞏固	ya-soo-si, boo-nan-ni（ヤスシ、ブナンニ）
Safety	項目無し	項目無し
Secure	安当、穩当、妥帖、安穩、平安、安定 (vt.) to secure a ship 保船 secured 鞏、鞏固	ya-soo-si, o-daya-ka（ヤスシ、ヲダヤカ）
Security	one who secures the performance of a contract 保領、保人, protection 保全之事, a security merchant 保商、保家 to be security for 保任 包管、擔保	te-ga-ta（テガタ）

表7 メドハースト『華英字典』（1847）における「安」「穩」「全」の解説と熟語解説

漢字の解説	関連熟語
【安】 rest, peace, still, at ease, quiet, unconstrained; to settle, to tranquilized; voluptuous, harmonious Used as a particle, how? where?	平安 (quietness, peace, tranquility), 安慰 (to console), 安楽 (joy, pleasure), 安歇 (to rest), 安分 (to be contented with one's lot), 安坐 (to sit down quietly), 不安 (disquieted), 安在 (where is it?) 安南, 安息香, 安居 (to dwell at ease), 安楽公 (a man of pleasure), 安民 (to tranquilize the people), 安心 (to compose one's mind), 安神 (to dedicate an idol), 安然 (tranquilly), 安歩 (a steady step in walking)
【穩】 to tread out the accumulated grain; secure; contented	安穩 secure, settled, 穩当 safe
【全】 the whole, complete, entire; to complete	完全 to finish. 万全 secure against all accidents. 両全 both complete. 全家 a whole family. 成全 to complete. 全備 full provssided. 全能 almighty.

「ヤスンズ」も「to protect」であり、支配者層が用いたであろう語である点で日葡辞書と変わりはないが、「平穩に統治し支配すること」から、一般語の「保護する、守る、かばうこと」に変更されたことは何を意味するのだろうか。そして「ヤスンズ」が「to protect」だからこそ、その守った結果としての「安全」が「well」になるのは当然であろうが、「a recovery」は何を意味するのだろうか。「a recovery」は悪い状態が想定されるなかでの救出や回復を示唆するものであり、漢字「安」の前提条件を彷彿とさせる解説ともいえる。英語なら「save, safety」の訳に近いといえよう (cf. secure, security)。しかし表6で確認する限り、「safe」には英華辞典では「安穩、主固、安妥、低妥、安寧、安当、極妥、妥当、穩当」とたくさん「安」の字を含む熟語を並べているが、「安全」は挙がらない。もちろん「secure, security」の漢訳も「安当、穩当、妥帖、安穩、平安、安定、保領、保人」であり「安全」は挙げられていない。

なお『英和・和英語彙』（英和部）では「safe」も「secure, security」も「ヤスシ」が共通の解説語であり、違いは前者には「無難に」、後者には「穩やか」の解説を加えていることである。

もちろんこの程度の少ない事例では明確な使い分けまでを判断することは難しいが、「safety」「security」の語源的特徴を考慮すれば、次のような違いとして整理できる。「save」と共通の語源をもつ「safe」に対して、「難」といほどの事もない。難といほどの事もなくやりおおせた」意の「無難」には「安」の動詞的意味がより強く意識されているように見える。つまり「safe」は「to protect」により守る、守られている状況を示唆している。相対的に「secure」の語源は「心配のないこと」であり、そもそもそういう厄介な状況に陥らないようにすることだから、「難」ではなく「穩やか」の語がふさわしいといえなくもない。しかし「無事」でも同様の解釈が可能であり、「無事」「無難」の使い分けは判然としない。

「ヤスシ ya-soo-si」の解説は四種にわけている。一つ目①は「brotherly, fraternal」であり、兄弟のような「親しさ、親身、友愛」が共通の特徴となる解説である。状況から考えれば、これは「ヤスシ」の用法のうちの「やすらかに」に該当する意味の翻訳と推測できるが、この解説から和語「やすらか」のイメージを重ねられるかといえれば、かなりのずれを感じる。「brotherly,

fraternal」の共通の特徴をどうとらえるかであるが、心理学ではパーソナルスペースという言葉(概念)を用いて相手との関係具合を測る手法がある。身体的距離と心理的距離とが一致することから、一定距離の内側に相手との距離を置く場合と、外側に置く場合との別があり、粗くいえば、前者は親しく心安い関係、後者は警戒する相手と識別できるとする。「brotherly, fraternal」をこの尺度で見れば、明らかに前者である。これと似た特徴を持つ英単語に「ease」がある。多くの日本人にとって「ease」は「容易」の解釈がまず思い浮かぶであろう。実際に研究社英和辞典のトップワードも「1. (事をする) 容易, 平易さ (⇔ difficulty)」である。多くの辞書の編集方針は現在使われる頻度の高い順に記載しているからである。しかし「ease」の語源はラテン語 *adjacēns* にまで遡ることができ、その意味は「lying near」である。これを概念的特徴と捉えてパーソナルスペースの文脈で言い換えれば、親しい関係を意味する。だからこそ、順番こそ異なるが、その解説も「2. 気楽, 安気, 安心. 3. (態度・様子などの) 堅苦しくないこと. 安易, 気軽 (easiness). 4. (体の) 楽, くつろぎ, 安静, 安楽, (痛みが) 楽になること. 5. (金銭面で) 困らないこと, 裕福. 6. (衣服・靴などの) ゆるさ, ゆとり. 7. (物価などの) 下がる傾向」と続く。この内容は一番目の解説単独の場合と比べて現代日本語「やすらか」のイメージにずっと近づいたと感じられるのではないだろうか。

ちなみに日本語「やすらか」を研究社和英辞典で検索すると「peaceful; tranquil; calm; quiet; restful」をまず挙げ、「安らかさ: ease; peace」の例も挙がる。つまり日本語「やすらか」には一対一で対応するズバリの英単語があるわけではなく、多様な文脈においては、当然に、適切な解説語も異なることを意味する。「brotherly,

fraternal」をパーソナルスペースから考える場合は「ease」という心理面に焦点のある言葉が適切な類似語となる。たとえばその他の語「peace」の場合なら、その反対語「war 戦争」の否定の関係で、イメージ的には戦争に伴う緊張した事態情態から解放された安らかさに意味のウエイトがおかれることになる。

二つ目(②)は「calm, safe, secure, well」であり、日葡辞書の「表3「平和・平穩・静穩・無事」の解説グループ」の解説に近く、伝統的に理解してきた日本語「安全」の受け止め方とも近い。「平穩, 静穩, 無事」を示唆する言葉といえそうである。

三つ目(③)は「ignoble, base, low」で“粗末な, 質の低い, 卑しい”の意味の付きまとう解説が並び、その共通の特徴は“質的に劣ること”を意味している点である。日葡辞書にはみられない解説であるが、広辞苑(7版)にも見当たらない解説である。ただし、(精選)日本国語大辞典^[2]では「格が低い身分が低い. 品質が劣っている」の解説を掲載しており、文献は「観智院本名義抄録(1241)」を挙げる。1701年の文献もあるが、単に値段が低いというより、質的に劣るという意味で安物のような「やす〜」の使われ方は現代にも受け継がれている。

最後(④)は「cheap」であり^{註2}、「安価, 値が安い」用法は日葡辞書でも掲載されている。

また「安心」の見出し語は掲載されていないものの、「不安心」の見出し語があり、その解説は「uneasy」である。英和^[13]で「easy」から検索すると「ta-ya-soo-ki: タヤスキ, 「easy-minded」には「ko-ko-ro ya-soo-si: ココロヤスシ」の解説が出てくる。ちなみに「ヤスシ」の「易し」的内容は、日葡辞書の場合も「タヤスイ(輒い)」の見出し語で引くと、その解説は「容易な(こと)」と出てくる。

『英華字典』では「安穩, 安当, 穩当」が「safe」

と「secure」に共通の訳語であり、両者の使い分けは明瞭ではないが、表7の『華英字典』も「secure」を動詞的に使う場合は「保」のつく熟語に代わる点の違いとして識別しやすい。「safe」との対比でいえば、「security」では明らかに確かさ、保証に関心の焦点があり、その結果として「穏やか」の解説につながってきているとも推測できる。この時代の「security」は固く守るとの意が中心にあり、保障、保証、担保の意味合いで使われていたと推測できる。

3.3 ヘボン（美国平文）の『和英語林集成』（1867）

3.3.1 辞書の特徴

James Curtis Hepburn (1815-1911) は米国長老派教会の医療伝道宣教師である。彼自身が日本での名乗りを「Hepburn」の音訳として「ヘボン：美国平文」と表記している。彼の編纂した初めての和英辞書『和英語林集成』における日本語の表記法がヘボン式ローマ字であり、今日まで日本で広くつかわれるローマ字の基礎となった。

1859年に宣教医として横浜に到着し、神奈川施療所を設けて活動を開始する。専門は脳外科であったが、当時の日本では眼疾が多く、日本での名声は眼病によるといわれる。1862年（9月14日）の生麦事件の負傷者の治療にもあたっている。また教育活動にも熱心で、後に明治学院、フェリス女学院となる基礎の塾も開設している。こうした幅広い活動を通じて多くの日本人と接触する中で、日本語を積極的に集め、1867年日本で初めての和英辞書『和英語林集成』（初版）を刊行した^[20]。その特徴は「生きた教師に学んだ日本語」といわれており、当時の様子を知る国語辞書としても高く評価されている。

和英 20,722 語、英和 10,030 語であり、当時の他の辞書類と比較して“本格的辞書”と評価

されるものであった。第三版（『和英語林集成』（丸善）1886）まで彼自身が改定に努めており、三版からはそれまでの「美国」表記を「米国」に変更している。ちなみに5版では著者名を「ゼー・シー・ヘボン」とカナ表記にしている。本論では初版を基本としているが、初版は再版、三版と比較して、若干ながら誤字脱字などもあり、再版、三版の方が説明も若干増えているところがある。しかし安全問題を考える際の大きな違いはないと考えている。なお発音にかかわるローマ字は現代にも通じやすい再版以降のものを採用した。

3.3.2 掲載の語彙と解釈

3.3.2.1 基本語「安全」等

表8は『和英語林集成』における「安全」の基本語等の解説をまとめたものである。二重線前は日葡辞書と同じ見出し語（参照：表1）を挙げ、二重線後には日葡辞書には見当たらない見出し語を挙げた。二つの辞書発行の時間差は260年余である。

「安全」は「アンゼン」と読み、和訓は「やすくまったし」であり、「completely safe; free from all evil or harm; perfect peace and tranquility」と解説する。これまでの二冊の辞書とは発音を含めて異なる解釈となる。発音は現代と同じになるが、ヘボンでは和訓を明記し、しかも2章で検討した「全を安んずる」ではなく、「安」を「ヤスク」、「全」を「マッタシ（マタシ、マタイの促音化）」とし、特定の状態を指す言葉として解説する。とくに「マッタシ」と訓ずることから解説に「completely, perfect」が挿入されていると考えられる。和語「マタシ、マッタシ」を「completely, perfect」とみなすことで、「完全」「安全」「保全」の区別はもちろん、完全や完璧と安全との区別も意識されないことになっているように見える。

なお、キリシタン版落葉集(1598)^[21]には「安：

表8 ヘボン『和英語林集成』における安全の基本語の解説

見出し語		解説
an-zen アンゼン 安全	yasuku mattash やすく まったし	completely safe; free from all evil or harm; perfect peace and tranquility
yasunji, -dzuru, -ta ヤスンズル 安	同左	tv. ① to make peaceful, happy, or contented; ② to tranquilize, to govern, to preserve peace.
yasui, ~ ki, ~ ku, ~ shi ヤスイ 安	同左	adj. (1) easy, not difficult ; (2) cheap, low in price ; (3) peaceful, free from trouble.
yasuraka ヤスラカ, 安	同左	easy, not difficult; free from trouble, tranquil, gentle, mild
an, アン, 安	やすし	freedom from trouble, sickness or calamity, ease, happiness, tranquility, (this word is only used in compounds) 【注：再版以後はこの括弧書きはなくなり、代わりに類語として「ochituku, odayaka」を挙げる】
Anji-, -dzuru, -ta アンズル 安	音訓+活用	to tranquilize, make happy; to be happy, to be in peace, free from trouble, or sickness 【再版, NY版, 上海版のみ】
Yasusa ヤスサ 安	同左	Easiness, facility, cheapness
Yasukarashimeru ヤスカラシム, 〜ル 【三版〜】	同左	tv. To make easy, make plain
Yasukaru ヤスカル 【三版〜】	同左	tv. To be cheap

やすし, あん, いずくんぞ, さだむ, をく」「全：せん, まったし」の和訓掲載がある。つまり日葡辞書作成段階でも当然に和訓を理解していたであろうが、和訓表記が無いということは、当時は少なくとも漢字の音訳の「アンゼン」としか発音していなかったと推定される。江戸末期には「ヤスク マタシ」と訓じていたのであろうか。

「ヤスンズル」のヘボンの解説は「① to make peaceful, happy, or contented; ② to tranquilize, to govern, to preserve peace」であり、①は個人の心情レベルでの解釈、②は社会レベルでの解釈と整理でき、これらの解釈を一つにまとめて表現すれば、日葡辞書「平穩に統治し、支配すること」に近く、さらにはっきりと平和の維持を記述している。

「ヤスイ, ~ク, ~シ」のヘボンの解説は「(1) easy, not difficult; (2) cheap, low in price; (3)

peaceful, free from trouble」であり、三通りの使い分けを示している(初版〜三版)。日葡辞書と比較すると、(1)と(2)の特徴は日葡辞書の「ヤスイ：容易である(もの)、また安価である(もの)」と一致し、(3)は日葡辞書の「安全：平和で無事平穩なこと」の解釈に近い。しかし細かく言えば、個人的心情の形容詞版である。

本論では基本的に三版までを取り扱うことにしているが、ニューヨーク版と上海版には三版までとは若干の解説の違いがある。両者はほぼ同じ内容である。特徴の一つは「アンゼン」の項目が無いことであり、いま一つは、「ヤスイ, ~キ, ~ク, ~シ」の項目には、三版までには無かった「(4) friendly, intimate」が加わっていることである。これはメドハーストの「ヤスイ」の①に近い。なお、再版とNY版と上海版に限っては「アンズル (安ずる)」の見出し語も掲載されており、「to tranquilize, make

happy; to be happy, to be in peace, free from trouble, or sickness」と解説する。初版にも三版にも存在しないもので、ごく常識的に判断すれば、「案（あん）ずる」と「安（やす）んずる」の混乱あるいは誤解の結果と捉える方が合理的に思われる。ちなみに「アンジ、～ズル、～ジタ：熟考する、あるいはあれこれと思ひめぐらす」は日葡辞書にも掲載されている別系の言葉である。

「ヤスラカ」は「easy, not difficulty, free from trouble」が「ヤスイ」と共通の解釈であり、違うのは「ヤスラカ」には「cheap, low in price」と「peaceful」が無く、「tranquil, gentle, mild」が加わっていることである。現代でも「ヤスラカ」に安価など価値の低いことを意図する解説は無い。「peaceful」と「tranquil, gentle, mild」の違いを取って漢語で言えば、「平安 vs. 静穏、安穩」くらいの違いであろうか。

二重線後半で目立つのは「安」を「アン」と読ませて見出し語にしている点である。その和訓は「やすし」であり、初版では「freedom from trouble, sickness or calamity, ease, happiness, tranquility, (this word is only used in compounds)」と解説する。なお再版以後はこの括弧書きを削り、代わりに類語「ochituku（落ち着く）、odayaka（穏やか）」を挙げる。これは漢字「安」のコアイメージと重なる解説である。

3.3.2.2 「安」語頭の二字熟語の検討

表9は「安」語頭の二字熟語23語の一覧表である（再版、三版も含む）。「安全」を含めれば計24語であり、日葡辞書（計23語）と共通する熟語は13語、新しい熟語は12語（安眠、安気、安康、安静、安息、安産、安撫、安直（ヤスネ）、安物、安佚、安安、無難）、消えた熟語は10語（安身、安然、安世、安盛、安国、安坐、安宅、安臥、安枕、安怡）である。消えた熟語の多くは現代の簡易な国語辞典類にも掲載

されていない。この新旧の交代でヘボンの列挙する24語は現代的用法にかなり近づいた印象である。

また和訓表示有の熟語は「無事」「無難」を含めて14語、「安全」も「ヤスク マッタシ」の和訓表示「有」であるから、これを加えると計15語である。この熟語群13語のうち「安撫」「安置」を除いた11語すべてが「ヤスク、ヤスキ、ヤスシ」と訓ませる。ちなみに「安撫」は「ナデ ヤスンズ」,「安置」は「ヤスンジ オク」と動詞に訓ませる。

再版からは「無難」も見出し語として掲載される。その和訓は「なやみ なし」であり、「free from trouble, without accident or harm, safely」と解説する。ちなみに「難」は『字通』^[22]では和訓に「なやむ、なじる、かたし、むつかしい」を挙げる。

これに対して「無事」の和訓は「なにごともない」であり、「without accident, without anything unusual occurring, safe, free from trouble」と解説する。解説「free from trouble, without accident」は両者共通であり、この解説だけでは明確な区別はつけ難い。

ちなみに現代用法（広辞苑7版）では「無難：①これといって特色はないが、また非難すべき点もないこと。平凡無事なさま。当たり障りのないさま。②危ないことのないこと。無事。」「無事：①取り立てて言うほどの変わったことのないこと。ア)事変のないこと。危険・災害・大過のなどが起こらない状態。平穩。イ)つつがないこと。健康なこと。②自然のままでも何人も人為を加えないこと。③ひまなこと。なすべきことがないこと。」であり、使われる状況によって異なるであろうが、実践的な安全問題において「無難」と「無事」の区別は難しい。古語辞典では「ヤスシ」の対語は「難（かたし）」とも記載されており、難の否定形「無難」は「ヤスシ（易

表9 ヘボン『和英語林集成』における「安」が語頭の二字熟語と解説

熟語 発音	「訓読み」 & 解説 (英語)
安心 アンシン ▽	「やすき-こころ」 a mind free from care, anxiety or trouble; composure, ease, tranquility 類語「安堵」
安眠 アンミン ●	「やすく ねむる」 quiet and sound or refreshing sleep
安否 アンピ ▽	「やすく いなや」 whether well or not, welfare, health
安置 アンチ ▽	「やすんじ おく」 安んじ置く to install or place an idol in a temple.
安堵 アンド ▽	ease, happiness, tranquility, freedom from care or trouble
安住 アンジュウ ▽	「やすく すまう」 living in safety, ease, or free from trouble or calamity
安閑 アンカン ▽	free from business, without working, idly 類語「うっかり」
安危 アンキ ▽	「やすき あやうき」 safety or danger, existence or ruin, welfare
安気 アンキ ●	peace or tranquility of mind, happiness, comfort
安居 アンキョ ▽	「やすく おる」 living in ease and comfort, free from trouble
安康 アンカウ ●	free from trouble or calamity 類語「無事」
安寧 アンネイ ▽	「やすく やすし」 tranquility, ease, freedom from sickness, trouble or calamity.
安穩 アンオン ▽	「やすく おだやか」 peace, ease, comfort; freedom from want, danger or disturbance; safely 類語「無事」
安楽 アンラク ▽	happiness, ease
安静 アンセイ ● (再版から)	to be at rest, without motion
安息 アンソク ●	rest, ceasing from labor 類語「休息」「休む」「憩」
安泰 アнтаイ ▽	安康と同じ
安産 アンザン ●	「やすく うむ」 an easy or natural labor
安撫 アンブ ● (再版から)	「なで-やすんず」 安撫する to quiet, tranquilize, pacify; to make contented and happy
安直 ヤスネ ●	cheap, a low price
安物 ヤスモノ ●	low price things
安佚 アンイツ ●	「きまま【再版】」 Living at ease, without necessary of work 「やすし【三版】」 Living in ease, without work, living in idleness
安安 ヤスヤスト ●	(adv.) easily, without difficulty, tranquilly, gently
無事 ブジ ▽	「なにごともない」 without accident, without anything unusual occurring, safe, free from trouble.
無難 ブナン ● (再版から)	「なやみ なし」 free from trouble, without accident or harm, safely

●は日葡辞書から見て新しく追加された熟語, ▽は日葡辞書と共通の熟語

し、安し)」の言い替えとも言えそうである。

なお参考までに付け加えると、漢字「難」はその図形的イメージ（鳥を燃やして水分がなくなる場面を設定した図形。この意匠によって、山火事や旱魃のような自然の災い、災難を暗示させる）と解説したうえで「コアイメージ：軟らかい」とは異なると解釈する^[4]。「軟らかい」のイメージは、軟らかくなってねちねちする→

スムーズにいかないというイメージに展開し、「障りがあって順調ではない（むずかしい）」の意味が実現されるという。つまり、物事が工程的にうまく進まないことが無いのが「無難」、問題にしなければならぬような「事」は無いとの評価の言葉が「無事」ということになる。

表10はヘボンの英和索引で「safe, secure」の解説に関して、初版・再版・三版を比較する

表 10 ヘボン『和英語林集成』英和索引「safe, secure」（初版・再版・三版）比較

単語	版	初版	再版	三版
safe	a.	無事, 息災, 大丈夫, 達者な, 確かな, 恙無い	無事, 息災, 大丈夫, 達者な, 確かな, 恙無い	無事, 息災, 大丈夫, 達者な, 確かな, 恙無い
safe	n.		hai-cho	haichō <i>Fire proof</i> ~ kwaji-ukeai darabako
save	tv.	助ける, 救う, 保つ, 済度する do szru	助ける, 済度する, do suru	救う, 助ける, 済度する, do suru
safely	adv.	無事に, 安全に, 確かに	無事に, 安全に, 確かに 恙無く	無事に, 安全に, 確かに, 恙無く
safety	n.		無事, 安全	無事, 安全
secure	a.	厳重な, 堅固な, 大丈夫な, 固い, 安康, 安心, 無事なる	厳重な, 堅固な, 大丈夫な, 固い, 安康, 安心, 無事なる	厳重な, 堅固な, 大丈夫な, 固い, 安康な, 安心な, 無事なる
secure	tv.	請合う, 護る, 固まる	請合う, 護る, 固まる	請合う, 護る, 固める
security	n.	安心, 安穩, 堅固, 固め, 請け合い, 引き当て, kahan-nin 請け合い人	安心, 安穩, 堅固, 固め, 請け合い, 引き当て, kahan-nin 請け合い人	安心, 安穩, 堅固, 固め; 請け合い, 引き当て, kahannin 請け合い人, 請け人, 保証人

形でまとめたものである。初版の間違いや補足の確認でもある。「safe (a)」の訳語に「安全」の表現は無く、「無事, 息災, 大丈夫, 達者な, 確かな, 恙ない」と解説する。しかし「safely」の形で「無事に, 安全に, 確かに」と初めて「安全」の言葉が登場する。「safety (n.)」の見出し語は再版からの登場であるが, その解説は「無事, 安全」である。

4. 外国人の観察した日本語「安全」の理解の検討

ここではイエズス会『日葡辞書』（以後 A と略）とメドハースト『英和・和英語彙』（以後 B と略す：とくに和英の部を指示する場合は B-1, 英和の部は B-2）と同『華英字典』（以後 B（華英）と略）『英華辞典』（以後 B（英華）と略す）およびヘボン『和英語林集成』（以後 C と略す：とくに和英の部を指示する場合は C-1, 英和の部は C-2）および現代的解釈の事例として『広辞苑』『日本国語大辞典』（以後 D と略）を比較しながら, 外国人が受け止めた日本語「安全」の特徴の変化とそれが現代の解釈にどのような

影響を及ぼしているかを検討する。

4.1 「安全」の受け止め方の変化

表 11 は 3 章で検討してきた四種類の辞書（A ~ D, 以後この略号で記す）の見出し語「安全」の解説一覧表である。

本論中心のテーマ「安全」に共通する解釈を探そうとすると, A には「無事平穩」, D には「平穩無事」の解説があり, C の「③ perfect peace and tranquility」は, 「perfect」を外して考えれば, 「平和で静穏ないしは平穩」と訳すことができ, 「平和で無事平穩」と言い換えても外的外れにはならないであろう。さらに B の「well」は広すぎる内容の言葉であり, 「無事平穩」あるいは「平和で静穏ないし平穩」とまでの限定はできないものの, 当然それらを含意する言葉である。つまり, A ~ D までの公刊時間差は 415 年であるが, 「無事」と「平穩」の組合せの感覚（平穩無事, 無事平穩）は四百余年ほどの間, 変化なく受け継がれてきたとも解釈できる。

しかしもう少し精密にその差異にまで関心を

表 11 「安全」の意味解釈の比較

略号 辞書名 (発行年)	見出し語	解説
A 日葡辞書 (1603)	アンセン (安全)	平和で無事平穏なこと
B 英和・和英語彙 (1830) B-1 和英の部, B-2 英和の部 B (英華) 英華辞典, B (華英) 華英辞典	アンセン (安全)	Well, a recovery
C 和英語林集成 (1867) C-1 和英の部, C-2 英和の部	アンゼン (安全) 和訓〈ヤスク マッタシ〉	① completely safe; ② free from all evil or harm; ③ perfect peace and tranquility
D 広辞苑 (7版) (2018)	アンゼン (安全)	① 安らかで危険のないこと, 平穏無事 ② 物事が損傷したり, 危害をうけたりするおそれがないこと

寄れば、その違いもまた明らかである。Aには「無事平穏」の前に「平和で」が付くのに対し、Dは「平穏無事」の解説の前に「① 安らかで危険のないこと。」の独立の解説が付く点である。その語順からは「安らかで危険のないこと」が「平穏無事」の内容とも解釈できる。そしてD「② 物事が損傷したり、危害をうけたりするおそれがないこと」は、D「危険」の解説が「危ないこと、危害または損失の生ずるおそれがあること」であることから、②はその否定形“「危険」のないこと”の具体的表現と捉えることができる。しかしその場合、修飾語となっている「安らかで」はどのように解釈すべきなのだろうか。「危険のない」状態でありながら「やすらかでない」状態も別にあると想定しての区別だろうか。

先に「無事・平穏」を願うのは現代人ばかりでなく、約四百年以上前の戦国時代に生きた人々も同じ…との解釈を肯定したが、四百余年ほど前の彼らにとって「無事平穏」の具体的内容は現代の我々の感覚「安らかで危険のないこと」や「物事が損傷したり、危害をうけたりするおそれがないこと」だっただろうか。

考える糸口は「平和で無事平穏」の表現中にあるように見える。戦国時代のように、社会の秩序が不安定で、何が起こるかわからない社会

状況下に暮らす人々の心情は、いかばかりであったろうか。戦争に限らず、身を守ることに必死の努力をしなければ生き残れそうにない状況下に置かれれば、人は将来の夢や希望はもちろん、日常生活の様々な物事もすべて棚上げにして、まずは生き残るための行動を採らざるを得なくなるだろう。そうした悪条件下から脱することができれば、つまり攻撃されて殺されるような悪条件の段階を脱したと確信できた時、人々はホットするに違いない。人は社会的動物とまでいわずとも、平和の到来とは生活の基礎レベルの秩序回復を期待できることではないだろうか。その基礎の上で、個々人の身の振り方やこれからの生活の具体的計画も建てることのできるのではないだろうか。それを“平和で”の表現に託しているようにみえる。

しかもこの平和への強い思いは「安全」の言葉に限定した解釈や特徴ではない。その証拠がAを検討した3.1.2の表3つまり「平和・平穏・静穏・無事」の解説グループ(安全, 安身, 安寧, 安泰, 安閑, 安国, 安世, 安穩, 安盛, 無事)と表4「やすらか」解説グループ(安然, 安堵, 安樂, 安坐, 安宅, 安居, 安臥, 安心, 安住, 安怡)の別である。表3のグループはどれも「平和」が解説の言葉に入っており、現代社会からみると、多少異様にも感じられる。

この中でただ一つの例外が「安身：和訓ヤスキミ：無事平穩にしていること」であり、「平和」の解説は入らない。ふつう個別の身（体）を問題にする時に「平和」の言葉は似合わず、現代感覚なら「無事」「健康」「(大)丈夫」くらいであろう。しかしAの「無事」の解説は「平和、静穩」であり、無事を「平和、静穩」に分解してこのグループにいれている。もっともAには「平和」の見出し語は無く、当時の日本人が少なくともよく用いていた直接の言葉ではなさそうである。

ちなみにDの「無事」の解説は「① 取り立てて言うほどの変わったことがないこと (ア) 事変のないこと、危険・災害・大過のないこと (イ) つつがないこと、健康なこと ② 自然のままに人為を加えないこと ③ なすべき事がないこと」であり、①(イ)は明らかに個人レベルであり、Aの「安身」に近いが、(ア)は個人レベルでも社会レベルでも使いうる解説となっている。「事変のないこと、危険・災害・大過のないこと」の裏返しは「平和」と連想できなくもないが、Aのように「平和で、平和になる」などの強い表現とはなっていない。

この点に関して19世紀半ばのCはどうか。Cは「① completely safe ② free from all evil or harm ③ perfect peace and tranquility」とあり、C③は先に指摘したように、Aの「安全：平和で無事平穩」とほぼ一致すると解釈できる。C②はDの「安全：② 物事が損傷したり、危害をうけたりするおそれがないこと」の解釈に近似する。

残るC①、すなわち「safe」であるが、これはどのように解釈すべきだろうか。C-2では「safe: 無事、息災、大丈夫、達者な、確かな、恙ない」と解説しており、「completely」を除いて考えれば、Dの「無事」①の解釈に近く、またD「安全」①の“平穩無事”とも重なる。少なくとも

明治維新前後頃のヘボンの「safety」の受け止め方は「safety = 無事」「無事平穩」程度に解釈しているということである。ちなみにA「無事」の解釈は「平和、静穩」であり、C「安全」③ともかなり近いともいえよう。つまり、CはA「安全」「無事」とD「安全」①の平穩無事と「無事」①の特徴を併せもつとも解釈できる。

残るD「安全」①のうちの「安らかで危険がないこと」、これはどこから出てきた発想だったのであろうか。現代日本社会は「safety = 安全」を“完璧な安全”“絶対安全”の言葉まで飛び出すまでの社会に変貌してきている。160年程度の時間差でここまで受け止め方が変わるのはいずれの社会的背景も大きかったに違いない。しかし他方で、Cを中間的、過渡期的解釈と位置付けることもできるが、伝統の受け止め方から変わる分岐点と考えることもできるのではないだろうか。

ヘボンの辞書作成段階では問題は大きくなかったであろうが、Cの「ヤスク マッタシ」の和訓添えと「perfect, completely, all」表現の組合せが日本社会に与えた影響は大きいようにみえる。C-1「マツタイ、～キ、～シ【全】」の解説は「形容詞 ① whole, complete, entire, perfect ② sound ③ gentle」であり、「安全」の解釈にはこの①の解釈を採用したことは明らかである。

そして近代国語辞典の最初といわれる大槻文彦著『言海』（明治27年）では「あんぜん【安全】：安くして全きこと。危なきこと無く欠けたること無きこと。」と解説した^[25]。「全きこと」の“欠けないこと”は漢字「全」のコアイメージのままであるが、「完」もマッタシと訓ずる言葉である。「安くして」はどの意味で捉えたのだろうか。C「ヤスシ」では（表8）「(1) easy, not difficult; (2) cheap, low in price; (3)

peaceful, free from trouble.」と解説しており、内容から見て(1)か(3)であろう。しかし(1)は客観的条件とも解釈できるが、(3)は心理的条件に見える。「全」の実現に「易々と、容易に」は似合わず、(3)の“心情が破綻しないように”の思いから“確実に”の意味あい「あぶなきことなく」を入れたように解釈できる。「危」は不安定さを問題にする言葉だからである。しかし(1)と考えれば「全」の実現にそもそも何の苦勞もいらぬ状況を指しているともいえるのである。この解釈に関連して日本国語大辞典(1972, 2000)^[26]の「安全」の解釈は「①(形動ナリ・タリ) 危険のないこと, 平穩無事なこと。また, そのさま。②(形動) 傷ついたり, こわれたり, 盗まれたりする心配のないこと。また, そのさま。③(～する) 心を落ち着かせること, 気持ちを安らかにすること」である。大槻の「安くして」や広辞苑(2018)の「安らかで」の修飾語は削られており、③の追加がある。ただしこの③は世阿弥の風曲集からのもので、彼の能理論には禪の用語が持ち込まれている。彼は「安全する」とも使うが、歴史的には彼の用法にとどまっているようにみえる。

さらにその語誌に「(2)「安全」と「無事」は現代語で意味が類似するが、「安全」には、なにか、外的な状況も完備していて、無理も生じなかった結果として、何ら心配もなくというニュアンスがあるのに対して、「無事」には「いろいろと心配事もないではなかったが、結果的にその心配も無用となって」というニュアンスがある。」と付記している。先に指摘したC「ヤスシ」(1)を用いて「全」の実現に何の無理もなくできるとの解釈説として紹介したものである。そして辞書の編集者の直感も現代の「安全」の言葉の受け止め方を表しているといってもよいだろう。しかし漢字「安」の概念的特徴のように、落ち着かない状態から落ち着く状態に切り

替わった結果という動的な受け止め方ではなく、最初から何の障りも無いおだやかな状態にあるという捉え方であり、基準とする概念的特徴からは大きく乖離し、まさに現代的受け止め方の特徴の指摘となっている。つまり付記の「安全」と「無事」に関する解説には現代的な「安全」解釈によるものであり、時間的観念の欠落という点で問題のある解釈と考える。これについては後に再度とりあげる。

また約40年後の1932~37年に富山書房から大幅改定された『大言海』が出版されるが「安らかにして全きこと。少しも障りの無きこと。後漢書夏恭傳「恭以恩信為衆所附擁兵固守獨安全」、易林節用(慶長)言辭「安穩、安全、安樂」、「家内安全」とある。つまり「あぶなきことなく→少しも障り無きこと」に代る。これは時間的観念の修正である。Cの「安全」②の解釈であるが、再び時間的観念がねじれて、Dの「安全」②につながっていく。

その他、明治・大正期発刊の代表的な近代国語辞典を加えて見出し語「安全」を一覧表化したものが表12である。表1の広辞苑(2018)と比較すれば明らかなように、「安らかで危険のないこと、平穩無事」に集約されてきたことが想像しやすく、現代の「安らかで危険のないこと」は「安くして全きこと」と「危なきこと無く欠けたること無きこと」の二文の組み合わせに由来している様子をもてとることもできる。なお、辞苑は1935年の発行であるが、戦後これは広辞苑と名を改め、現在の第7版(2018)まで続いている。広辞苑の初版(1955年)には「安らかで危険のないこと」と解説し、安全剃刀など工学系道具類等の熟語を列挙して解説する。この方針は第二版(1976年)までは同じだが、第三版(1983年)からは「① 安らかで危険のないこと。平穩無事。 ② 物事が損傷したり, 危害をうけたりするおそれがないこと」と下線を付し

表 12 近代国語辞典（戦前まで）と「安全」の解説

辞書	見出し語	解説	引用文献
言海 大槻文彦著 (1891年 M24年)	あんぜ(名) 安全	安くして全きこと。危なきこと無く 欠けたること無きこと。	家内～
辭林 金沢庄三郎編纂 三省堂 1907年	あんぜん (安全)名	恙なきこと。安きこと。 ～灯, ～弁	
大日本国語辞典 上田萬年, 松井簡治共著 富山房 金港堂 1915～1918年	あんぜん (安全)	安くまったきこと。無事。息災。	さかゆく花「久しく四夷を鎮撫して, とこしなへに万民の安全を致す」後 漢書「恭以恩信為衆所附擁兵固守独 安全」列女伝「姜詩夫婦至孝〈中略〉 比落蒙其安全」
廣辭林 三省堂 (大正14年, 9月)	あんぜん (安全)名	危難なきこと・恙なきこと。やすき こと。 安全剃刀, 安全器, 安全週間, 安全 第一, 安全地帯, 安全燈, 安全弁, 安全マッチ, 安全率	
大言海 大槻文彦著 富山房 1932～37年	あんぜん (安全)名	安らかにして全きこと。少しも障り の無きこと。	後漢書「恭以恩信為衆所附擁兵固守 独安全」 易林節用(慶長)「安穩, 安全, 安樂」 「家内安全」
辭苑 新村出編纂 1935年	あんぜん (安全)名	危険のないこと ～カミソリ(安全剃刀), ～しゅうか ん(安全週間), ～だいいち(安全第 一), ～ちたい(安全地帯), ～とう (安全燈), ～ピン(安全ピン), ～ほ しょうじょうやく(安全保障条約), ～マッチ(安全マッチ), 安全率	

なお、本論では代表的な日本語辞典のみを、戦前までの掲載で十分と判断したが、明治以降の日本語辞書において「安全」「安心」の語釈を丁寧に列挙した論文がある^[29]。これは分析方法が全く異なるため、本論では検討の対象外としているが、辞書の解釈一覧表は本論の結論に疑問がある場合には参考になろう。

た部分の解説を追加している。平穩無事に関しては平家物語を文献として挙げている。それ以後の版では安全を付す熟語数が増える程度の変更にとどまっている。

しかし「安らかで危険のないこと」のケースで「ヤスラカ」の対象は何か、誰なのだろうか。また「欠けが無いこと」と「危なきことが無いこと」は同じと解釈していいのだろうか。

表現を換えてまとめると、少なくとも明治維新前後までは「平和」の希求は強かったが、現代になると「安全」の言葉に関連しての「平和」の言葉は辞書からは消えた。第一次、第二次世界大戦はCとDの間に起き、日本も巻き込まれた戦争である。現代日本社会においても「平和」

の言葉が死語になったわけではなく、むしろ現代社会でも頻度の高い言葉でもあるが、少なくとも「安全」の解説の中から「平和」の言葉は消えている。

これは何を意味するのだろうか。平和は現代日本社会では当然の前提となり、戦争の危機を意識することも稀になり、そのため相対的に、個々人の身の安全、身を危険にさらすことが強く意識される社会になっているということなのであろうか。このことを調べるために、古典文学作品を用い、「安全」がどのような文脈で用いられていたのか、また現代語訳との比較も可能な方法を用いて検討している。これは4.3で取り扱う。

4.2 動詞「ヤスンズル」の受け止め方の変化

表13は「ヤスンズル」に関する四種類の辞書の解説の一覧表である。結論を先に指摘すると、形式から明らかなように、A, B, Cはどれも他動詞としての用法を記し、多くの場合、「安んじた」結果が「安全」の内容と一致する。しかしDでは自動詞、他動詞の両方の用法が掲載され、いずれの場合も動作の結果として「安全」の解説内容に一致するのは「安らかで」に限定される。もっとも動詞「安んずる」は漢字「全」を含まない言葉であり、それにも拘らず、見出し語「安全」の解説と一致してしまう方が、基準から逸脱しているというべきなのであろう。

A「平穩に統治し、支配すること」とC「② to tranquilize, to govern, to preserve peace.」の一致は明らかであるが、Bも、少し広すぎる言葉「to protect」を用いている点で問題はあるものの、支配者層の立場からいえば、含意するとまとめてもよいだろう。つまりA, B, Cともに「平穩に統治し、支配すること」の解釈において一致するといってもよいだろう。

そしてAの動作の結果としてA「安全」の解

説内容と一致し、C②の動作の結果としてC「安全」③の解説内容は「complete, perfect」を省いて解釈すれば、一致する。C①もこれをまとめて「無事」と解釈するなら一致しているともいえるかもしれない。Bの場合も動作としての「to protect」の結果が「well, a recovery」と考えることは十分にできる。つまり「ヤスンズル、ヤスンジ」という動作内容はA, B, Cともに各「安全」の解説内容と一致しているのである。

しかしC①の「tv. to make peaceful, happy, or contented」は「無事」と解釈する前に、D1の「I (自サ変) ① やすらかになる。平安になる。安心する。② それに満足して不満に思わない。甘んずる。」に近似するとも指摘すべきであろう。ただし、Cは他動詞、D1-Iは自動詞ではあるが、英語の場合は構文上の区別であり、対象を自身にすれば自動詞的に使うこともできる。D1にはIIとして他動詞サ変の記載があり、「安らかにする。安泰にする」と解説する。なお表13ではD2として日本国語大辞典(第二版)を追加記載した。これはD1と比較すると、他

表13 「やすんじ、やすんずる」をめぐる解釈

辞書(発行年)	見出し語	解説
A 日葡辞書 1603	ヤスンジ、 ～ズル	平穩に統治し、支配すること
B 英和・和英語彙 1848	ヤスンズ	to protect
C 和英語林集成 1867	ヤスンズル	tv. ① to make peaceful, happy, or contented; ② to tranquilize, to govern, to preserve peace.
D1 広辞苑(7版) 2018	ヤスンズル 文語: ヤスンズ	I (自サ変) ① やすらかになる。平安になる。安心する。② それに満足して不満に思わない。甘んずる。 II (他サ変) 安らかにする。安泰にする。(引用: 太平記)
D2 日本国語大辞典 第二版	ヤスンズル (ヤスンズ: 文語)	I (自サ変) ① 安らかになる。平安になる。安んじる。(当世書生気質 1885-6〈坪内逍遙〉, 韓国併合の詔所 1910) ② 与えられた状態などに満足する。甘んずる。安んじる。(新聞雑誌 9号明治四年 1871, 浮雲 1887-89〈二葉亭四迷〉) II (他サ変) ① 安らかにする。やすめる。安んじる。(古文尚書平安中期 950頃, 医心方天養二年 1145, 太平記 14C 後, 三体詩素隠抄 1622, 浄瑠璃用明天皇職人鑑 1705, 十善法語 1775, 小学読本 1873 ② 甘く見る。軽く見る。あなどる。安んじる。(滑稽本浮世床 1813-23)

動詞に「② 甘く見る. 軽く見る. あなどる. 安んじる」が追加されている点で若干の違いはあるものの、そうした違いよりは根拠に挙げる文献数が大きく異なり、文献年代を使って自動詞と他動詞とでよく使われた年代の違いを明らかにできるために追加したものである。

自動詞の文献は1871～1885年（明治初期）であり、Cの編纂時期と重なる。それに対して他動詞の文献は1件の例外（小学読本 1873）もあるが、その他5件はほぼ平安期～江戸時代後期前半（950～1776）である。明治前半には漢文・漢字文化が盛んであったが、漢字教育の負担が批判の対象になるようになり、やがて口語調の文体も普及していき、今日では「安んずる」の表現自体は文章用語としてしか使われなくなって久しい。

また統計的な確認はできてはいないが、今日では「ヤスンズル」は文語としてもあまり用いられているようにはみえず、動作を示す、つまり「安らかで危険のないこと」の結果を得るための動作としては「安全を図る」「安全を確保する（安全確保）」等の別種の動詞を伴う傾向が認められる。

これは何を意味しているのだろうか。単純に推理すれば自らの「安らかな状態」に関心は強まるものの、相対的に「他者を安らかにする」発想は希薄になってきている、ということになる。Aの公刊は戦国時代末期であり、Cの公刊は武家政権体制の終焉という大激動期にあたる。それに対して今日の日本社会は生産人口が全員戦争未体験者になって既に10年を経過している。戦争や平和の意味について知識は持っているが、生活実感としては「平和で秩序ある社会」はすでに当然の前提になって久しく、苦しかった実感は無いのである。そのせいか、現代日本社会では安全の要求も当然のように受け止められているものの、安全とは何かと問われ

たときの典型的回答が「安らかで危険のないこと」であり、危険とは何かと問われたときの典型的回答が「物事が損傷したり、危害をうけたりするおそれがないこと」であるが、そこに何の疑問も持たないのだろうか。そもそも「危険のないこと」を修飾する「安らかで、安く」の意味は何なのだろうか。「ヤスク マッタシ」の和訓の呪縛にみえてこないだろうか。

また現代社会では「安全」は行動目標となり、守り札に使われる頻度高い言葉の一つになって普及している。しかしその内容を深く考えたり、感謝したりする習慣はかなり前から失われ、安全に関する評価はそれが失われたときに振り返って問題にされる傾向にあり、その責任を厳しく追及する傾向にある。「安全でなかった」ということは弁解の余地のない結果として責め立てられるようになってきている。「安全」という行動目標は当然の結果といえるほど容易に達成できるものなのだろうか。

4.3 古典文学作品にみる「安全」の用法

外国人の観察からみれば、「平和で無事平穏なこと」の解説は少なくとも明治維新前後頃までは確かに継承していたように見える。A～Cまでは約260年である。C～Dまでは約150年であり、その間に現代の「安らかで危険のないこと。平穏無事」の解釈に変化する。少なくとも「平和」の言葉は安全関連語からは消えたように見える。現代日本社会は知識として戦争を知っているに過ぎない人々から構成されるようになり、その違いが「安全」の理解にも影響を及ぼしている可能性を感じるが、そもそも「安全」の用法、とりわけどのような文脈で用いてきたのか、そのルーツに関心が向かうことになり、明治以前の文学作品において、「安全」の言葉を用いる文脈の特徴を調べてみることにした。以下はその検索結果である。

日本の古典文学作品にはしばしば現代語訳と明記する作品も発刊される。当用漢字で教育された現代日本人には原文の旧字や達筆な崩し字は読み難く、また言葉の意味も変化しているものもあれば、現代では見ることもなくなった死語の漢字も少なくない。そのため作者の意図を正確に読み解くことができるように翻訳の必要性も出てきている。原文を尊重して注や補として解説を加えることでギャップを埋める方法もあるが、語彙自体や文章そのものを現代人にわかりやすいものに置き換える方法もある。

「安全」は字画も少なく、死語どころか頻用される言葉の一つであるが、例外ではないらしい。たとえば、日本古典文学摘集でデジタル化して公開している作品《平家物語（13C前）、宇治拾遺物語（13C前 1213～21）、方丈記（13C前 1212頃）、風姿花伝（15C初）、五輪書（17C中頃）、奥の細道（1702）、雨月物語（江戸後期 1770年前後）、遠野物語（1910）》に関して「安全」をキーワードに検索したところ、計8件のヒットがあった。全作品に原文と現代訳語文が揃っているのであるが、原文でのヒットが4件（表14）、現代語訳文でのヒットが4件、原文と現代語訳文の両方でヒットしたのは1件（風姿

花伝）であった^[23]。

原文で「安全」がヒットした4件のどれもが「（四海も含めて）天下」の言葉との組合せで用いている。しかしそのうちの『平家物語』3巻と7巻の現代語訳文では、原文の「安全」は「安泰」に置き換えられている（「入道の悪心を和らげて、天下の安泰を保たせてください」「天下は久しくこの平家の悪逆に犯され、国内は永く安泰を欠く状態であります」）。現代語訳者の立場からは「天下」と「安全」の組合せよりも、20世紀後半以降の日本では「安全」を「安泰」に置き換えた方が原文の意味意図が伝わり易いと考えたのであろう。

その反対もある。現代語訳で「安全」がヒットした4件中3件の原文に「安全」の言葉は無かった。1例目『平家物語』第11巻逆櫓の現代語訳は「よい大將軍というのは、駆けるべきところは駆け、引くべきところは引き、身を安全に保って敵を滅ぼすものです」とあるが、原文は「よき大將軍と申すは駆くべき所をば駆け、引くべき所を引き、身を全うして敵を滅ぼすを以てこそ、よき大將軍とはしたる候ふ」である。

二例目『平家物語』4巻6競でも、現代語訳は「妻や子たちをあちこち安全な場所に隠れさ

表14 「安全」の言葉を用いていた文学作品（日本古典文学摘集検索結果）

文献	原文における「安全」の用法
平家物語第3巻 医師問答	…入道の悪心を和らげて天下の安全を得せしめ給へ
平家物語第7巻 山門返牒 (13世紀前半)	…然一天久侵 ^二 彼天逆 ^一 四海鎮不 ^レ 得 ^二 其安全 …然りといへども一天久しくかの天逆を侵されて四海鎮にその安全を得ず（四海：① 四方の海。よものうみ。② 《四方の海の内の意》国内。世の中。天下。また、世界。「四海を掌握する」「四海同胞」③ 仏語。須弥山（しゅみせん）を取り巻く四つの外海）
宇治拾遺集：五色の鹿の事 (1213～21年頃)	……その後より天下安全に国土豊かなりけりとぞ
風姿花伝（世阿弥の書） (15世紀初頭)	…聖徳太子が秦河勝に仰せつけ、天下安全のため、また諸人の快樂のため、六十六番の遊宴を成して申樂（猿樂）と名づけられて以来、

れ…」であるが、原文は「妻子共をば彼処へ立ち忍ばせて」である。三例目『平家物語』第9巻5樋口被斬も現代語訳では「そもそも武人が幅広く交流しようとするのは、有事の時に一時の安全を確保し、少しでも命の時間を稼ごうと思うからだ」であるが、原文は「抑も弓矢取の我も人も広い中へ入るといふは自然の時一まづの息をも継ぎ暫しの命をも生かうと思ふ為なり」である。

事例が少なく、偶然の結果との区別は難しいが、少なくとも12世紀後半から13世紀前半にかけて「安全」は天下国家レベルの文脈で使われ、個々人の身を問題にするレベルではあまり使われていなかったように見える。もっともその多くは軍記物の性格も関係していよう。それに対して、現代では「安全」の言葉はもっぱら個人的な身体問題に用いられており、むしろ天下国家レベルでの使用に抵抗があるように見える。

5. 日本社会の「安全」の受け止め方の考察… 「ヤスク マッタシ」vs.「ゼンヲヤスンズル」

漢字熟語の読み方は文脈によっていろいろであり、漢字熟語「安全」を「ヤスク マッタシ」とも「ゼンヲヤスンズル」とも訓むことができる。2.1.3で取り上げたように「完璧帰趙」の四字熟語は、故事来歴からいえば、「璧（へき）を完（まっ）うして趙に帰る（完璧帰趙）」を意味する。この場合の「完璧」は“動詞+目的語”構造であるが、二字熟語として「完璧」だけを用いる日本では“形容詞+名詞”構造と受け止めている。つまり“完全な璧（玉）”の意味に読んできている。“動詞+目的語”の構造として読むか、“形容詞+名詞”の構造として読むかは、著者の意図を尋ねられているのでなければ、正誤の問題ではないともいえよう。しかし中国語スクリプトというwebサイトでは「完璧」は

「完全な玉」ではなく、「玉を全きものとする」という動詞+目的語構造の意味です。「動詞～+名詞○」の構造の熟語を一般に日本人は「○を～する」ではなく、「～な○」と取りがちですので注意しましょう”との指摘をしている^[24]。「完璧」の広辞苑（2018）の解説は「欠点が無く、すぐれてよいこと。完全無欠」であり、日本人的特徴の出ている典型事例であることがわかる。これが日本人的解釈の特徴だとすれば「ゼンヲヤスンズル」と訓むより「ヤスクマッタシ」が自然な受け止め方であったといえないだろうか。それをヘボンが受け止めて記述したと考えるのが自然な解釈といえよう。

しかし大切なのは“どのようなコンテキストであればどのように読むことが適切か”の判断ではないだろうか。少なくとも現代社会において、どちらの読み方が適切だろうか、そう考えて取り組むべきではないだろうか。

「ヤスク マッタシ」を受けて明治以後の辞書類は「安全」を解釈するようになったことは表12に示した通りである。最初の言海では「安くしてまったきこと。危なきこと無く欠けたること無きこと」であるが、改訂版の大言海では「安らかにして全きこと。少しも障りの無きこと」と訂正されている。広辞苑のもとになる辞苑（1935）では「危険のないこと」と大きくずれ、その延長線上に現在の解釈「① 安らかで危険のないこと。平穩無事。② 物事が損傷したり、危害をうけたりするおそれのないこと」（広辞苑2018）があることは容易に推測できる。

「安らかで危険のないこと」の中の「安らかで」とは何を意味しているのだろうか。「安全」の言葉は役に立っているのだろうか。「完全、完璧」「パーフェクト」と解釈していくことは事態改善に貢献しているだろうか。一部の人々にすぎないかもしれないが、「絶対安全」の掛け声を責める側も責められる側も叫んではいけないだろ

うか。ミスも含めた事故に対して過酷な追及をする社会になっていないだろうか。その厳しい追及の結果、社会はよくなっているだろうか。

「ゼンヲヤスンズル、全を安んずる」と訓むと、見えてくる世界は大きく変化する。「ヤスンズル」は統治者のいる社会で使ってきた言葉のようであるが、昔ならともかく、現代日本社会は民主主義国家であり、国民主権の思想のもとに生活を展開している社会である。天皇が、統治・支配者が、ではなく、国民一人一人が権利と責任を背負う政治体制のもとに生活を構築している社会であり、全ての者が安らかに暮らせるようにという祈りに近い言葉の世界が「ゼンヲヤスンズル」の切り拓く世界であるといえるのではないだろうか。その点では広義の政治理念ともいうべき広がりや深さをもつ言葉である。

その場合の「ゼン(全)」とは何を指すのだろうか。地球環境問題が国際社会問題として取り組まれている現在、“人類”“すべての人々”でよいだろうか。仏教では古くから“山川草木悉皆成仏”という物事の捉え方を教えている。地球環境問題を考える現代社会では、当然に、人類という発想をも超え出て、生命圏ともいわれる地球上のすべてのものたちがそれぞれ相応に穏やかな暮らしが続けられるようにすることまで視野に入れなければならない時代に入っているのではないだろうか。2015年9月に国連サミットで採択されたSDGs(Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標))運動も同じ方向を目指しているように見える。その基本は「貧困をなくす=誰も取り残さない」「持続可能な世界を作る=私たちの世界を変える」である。

時代状況の中で伝統の言葉「安全」をどのようにとらえればよいのか、改めて考えてみる時期にきているのではないだろうか。母国語は理性的に学ぶ言語ではないだけに、言葉が潜在的に持っている世界がそのまま伝承されてきてい

るように見える。その世界を覗いてみると、理性的に選ばれるだろう意味ばかりでなく、時代の変化の中で消えていった意味世界もみえてくる。つまり言葉は先人たちがどのように生きようとしていたかを垣間見ることのできる道具でもある。しかし逆に言えば、今の時代を我々はどうか生きようとしているかが、後世の人々に言葉を通して伝わるということでもある。

言葉の解釈は変化して当然なのである。だからこそ、歴史を振り返り、先人たちの様々な思いや姿勢が込められている言葉に静かに耳を傾け、これまでの生き方とこれからの生き方を考え抜いたうえで、選択していくことが大切なのではないだろうか。

日本人社会における「安全」の受け止め方の本論でのまとめは「ヤスク マッタシ」との和訓解説を入れたヘボンの和英辞典の影響の大きさ、分岐点になってことを明示することである。それを明らかにするために、前後の時代の解説を日葡辞書、メドハーストの英和・和英辞典、広辞苑を中心に日本人編集の日本語辞典を配置した論文構成としている。当然に出てくる疑問に答えるには、もっと多くの角度からの検討が必要なことも明らかであり、その点で「日本社会の「安全」の受け止め方」の第一報に過ぎない。第二報では、和訓の伝統とは何であるのか、を取り上げる予定である。日本語を母国語としている人にとって「ヤスク マッタシ」や「ゼンヲヤスンズル」の識別など普段は意識することもないはずである。しかしそれが及ぼしている影響の解析は「安らかで危険のないこと」まで解釈がずれている今日では改めて考察の必要があると考えるからである。

また本論では「危険」や「リスク」などの危険関連語について、現代日本社会の常識に従った使い方をしているが、本論で採用している分析とつなぎ合わせる道具としての概念を利用す

る方法でみれば、日本社会の受け止め方の弱点、一言で言えば時間観念の欠落、警告概念と結果概念の区別が出来ていない点がみえてくるはずである。これについては「安全」の受け止め方の検討を終えた後で、「危険」の受け止め方として取りまとめる予定である。

注 1

見出し語のある関連語に次のものがある。「ヘイアン（平安）：タイラカニ ヤスシ すなわち アンノン（安穩）：平和、静穩」「ヘイギン（平均）：タイラカニ ヒトシイ 平和で一致和合すること」後者の事例には「国を平均に治むる」を「国を平和に統治する」と解説している。

注 2

最後の「ヤスシ」は原本の見出し語には「ヤスレ Yas're」とあるが、その解説は「cheap」であることから、索引を作って整理した著者（加藤・倉島編著）の索引には「ヤスシ（ヤスレ）（cheap）」と掲載されている。続く見出し語は「ヤスモノ yas'mo-no : base goods」であり、発音は不明か誤植かわからないが、「cheap」の使い方があったことは間違いない。

引用・参考文献：

- [1] 広辞苑（第7版）2018 岩波書店
- [2] 「安全・安心な社会の構築に資する字科学技術政策に関する懇談会」報告（2004年4月）
- [3] 廣松渉他編集『哲学・思想事典』（2010）岩波書店 p.209
- [4] 加納喜光（2011）『常用漢字 コアイメージ辞典』中央公論新社
- [5] 諸橋轍次『大漢和辞典』大修館
- [6] 金谷治訳注『韓非子』岩波文庫（1994）第二冊
- [7] 行政院飛航安全委員會 100年
<https://www.ttsb.gov.tw/1133/1134/1147/10299/>
- [8] “五年規劃”草案文本專題解説文章——無危則安 無損則全 構建安全城市納入五年規劃
<https://www.gov.mo/zh-hant/news/156817/>
- [9] 戸川芳郎監修『全訳漢字海 第二版』三省堂（2006）
- [10] 土井・森田・長南編訳（1980），邦訳日葡辞書，岩波書店
- [11] 森田武編（1989）『邦訳日葡辞書索引』岩波書店
- [12] 藤堂明保・加納喜光編（2005）『学研新漢和大字典』学習研究社
- [13] 加藤知己・倉島節尚編著（2000）『幕末の日本語研究… W.H. メドハースト英和・和英語彙…複製と研究・索引』三省堂
- [14] ウォルター・ヘンリー・メドハースト
<https://ja.wikipedia.org/wiki/>（2019年12月3日確認）
- [15] 和英辞書の世界初と日本初（明治学院大学図書館）
<http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/waei/topics/medhurst.html>（2019年12月3日確認）
- [16] 『蘭語訳撰』（京都外国語大学附属図書館）
<https://www.kufs.ac.jp/toshokan/50/rango.htm>（2019年12月3日確認）
- [17] Chinese and English Dictionary, Batavia: Parapattan Vol.1 and 2 1842-1843（本文中では『華英字典』とも略す）
- [18] W.H. Medhurst (1848), SEN, English and Chinese Dictionary Vol.1 & 2, SHANGHAE Printed at The Mission Press, 1848（本文中ではメドハースト『英華辞典』とも略す）
- [19] 『英和・和英辞典』（京都外国語大学附属図書館）
<https://www.kufs.ac.jp/toshokan/gallery/senk57.htm>
- [20] 和英語林集成デジタルアーカイブス（明治学院大学図書館）
<http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/waei/>
- [21] 杉本つとむ（1984）『ライデン大学図書館蔵落葉集（1598）影印と研究』ひたく書房 p.219, p.81
- [22] 白川静『字通』平凡社
- [23] 日本古典文学摘集（2019年12月3日確認）（平家物語 7巻原文）
<https://www.koten.net/heike/gen/105/>（平家物語 3巻原文）
<https://www.koten.net/heike/gen/043/>（風姿花伝 序 原文）
<https://www.koten.net/kaden/gen/001/>（宇治拾遺集 五色の鹿 原文）
<https://www.koten.net/uji/gen/092/>

- (平家物語 11巻逆櫓現代訳)
<https://www.koten.net/heike/yaku/160/>
(平家物語 4の6競 現代訳)
<https://www.koten.net/heike/yaku/057/>
- [24] 中国語スクリプト故事成語「完璧」<http://chugokugo-script.net/koji/kanpeki.html>
(2019年12月3日確認)
- [25] 大槻文彦『言海』(明治27年)
- [26] 日本国語大辞典(1972年, 2000年, 2006年)
- [27] 豊田實「英和及び和英辞書の発達…明治20年迄… (A Brief History of English-Japanese and Japanese-English Dictionaries down to the 20th Year of Meiji (1887))」英文學研究 vol.10(1), pp.49-77, 1930 (一般財団法人日
本英文学会)
- [28] 永嶋大典(1970)『蘭和・英和辞書発達史』講談社
- [29] 村上道夫 2016, 明治時代以降の時点における「安全」と「安心」の語釈, 日本リスク研究学会誌 26(3) p.141-149
- [30] ルイス・フロイス(岡田章雄訳・注), 日欧文化比較(大航海時代叢書XI アビラ・ヒロン『日本王国記』岩波書店)

(原稿受付日: 2019年12月9日)

(掲載決定日: 2020年1月20日)